

上大利北土地地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

# 牛頸本堂遺跡群Ⅰ

～ 第3次調査 ～

大野城市文化財調査報告書第61集

2003

大野城市教育委員会

上大利北土地地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

# 牛頸本堂遺跡群Ⅰ

～ 第3次調査 ～

大野城市文化財調査報告書第61集

2003

大野城市教育委員会



出土遺物



遺跡全景



竈跡細部



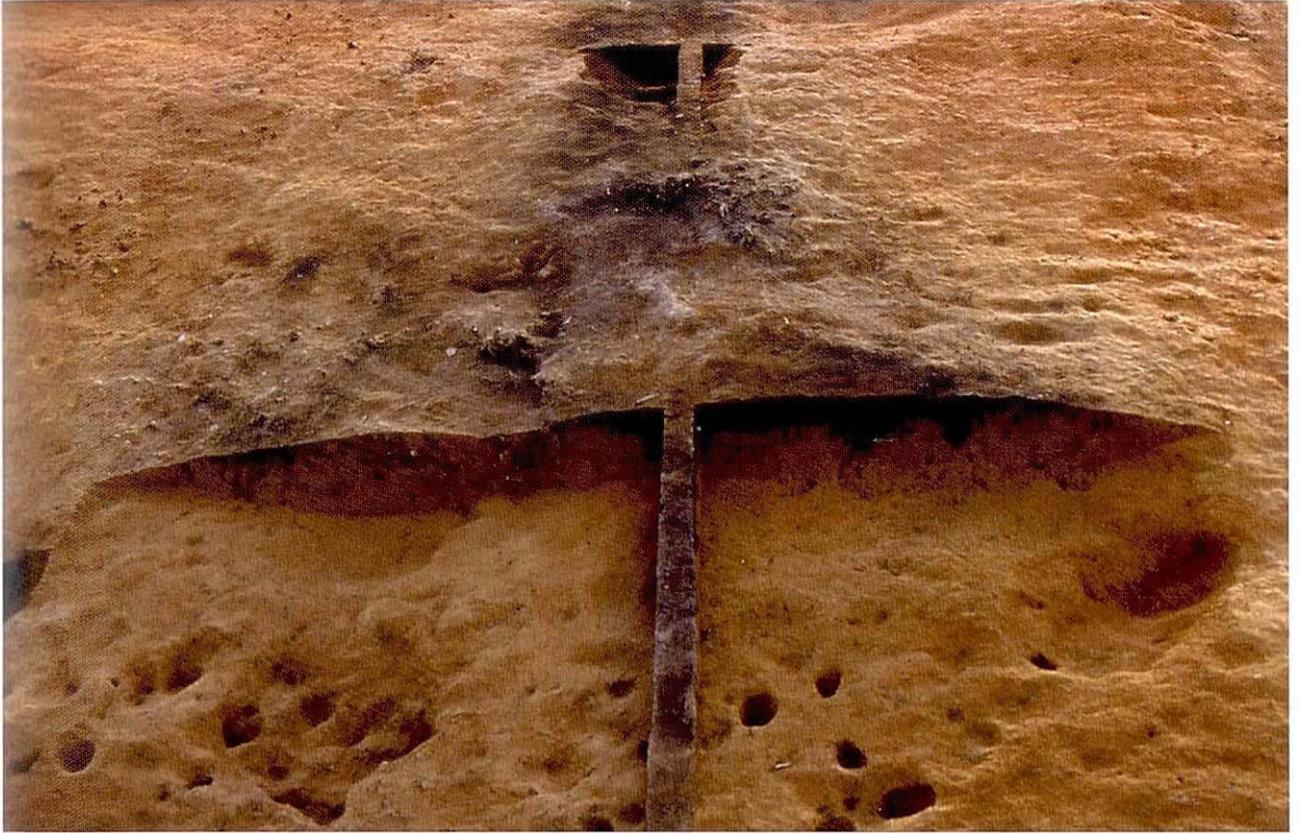
窯跡全景



窯跡細部



窯跡細部



灰原前庭部



前庭部灰層除去後

## 序

上大利地区では事業面積が48haにおよぶ大規模な区画整理事業が計画され、平成13年度より本格的な発掘調査を実施しております。

今回報告する牛頸本堂遺跡第3次調査では、7世紀前半の窯跡1基が見つかり、九州の須恵器編年において重要な資料となりました。また、区画整理事業地内では須恵器窯跡や工人の集落などが見つかり、牛頸窯跡群の操業に関して重要な発見が相次いでいます。今後本書の成果が教育や研究の面におきまして、広く活用していただければ幸いに存じます。

今回の調査は、大谷女子大学の全面的なご協力をいただきました。調査を指導されました中村浩教授をはじめ、学生諸姉には寒風の中発掘作業をしていただき厚く御礼申し上げます。また、上大利北土地区画整理組合をはじめ(株)大成建設などの関係者ならびに発掘調査作業員や地元の方々にご理解とご協力をいただきましたことに厚く御礼申し上げます。

平成15年10月吉日

大野城市教育委員会

教育長 古賀宮太

## 例 言

- 1、本書は、平成15年3月3日から20日まで実施した大野城市大字上大利617番地他所在本堂遺跡第3次発掘調査の報告書である。なお、上大利地区は牛頭窯跡群の範囲内に含まれており、こうした歴史事象を踏まえたことから、本書の表題を『牛頭本堂遺跡群』とした。
- 2、調査は、大野城市教育委員会主催のもと、大谷女子大学教授中村浩の指導を得て実施した。なお調査組織は後述する。この間、大谷女子大学文学部文化財学科学生（後出）、及び地元の方々（後出）の参加協力を得た。
- 3、調査期間中、自然科学試料の採取のため岡山理科大学鳥居雅之教授及び同大学学生の来訪があった。なお当該報告は後に刊行する報告書に掲載する予定である。
- 4、遺物整理は、大谷女子大学考古学研究室（代表中村浩教授）が担当し、博物館で行った。また自然科学の分析では、文化財学科三辻利一教授の手を煩わした。
- 5、本書で使用した写真のうち、調査中のものは大野城市教育委員会技師石木秀啓、及び中村が撮影し、焼付け等は、大谷女子大学博物館学芸員下村恭子が担当した。さらに遺物写真については阿南写真工房が担当した。また校正他の編集補助を大谷女子大学博物館学芸員池田千尋が行った。
- 6、本遺跡の遺物・実測図・写真は、大野城市教育委員会にて管理・保管されている。
- 7、本報告書の執筆は、それぞれ文末に記述しており、全体の編集は中村が行った。

# 本文目次

第1章 調査経過 .....	1
1、調査に至る経過	
2、調査体制	
3、調査の経過	
・ 日誌抄	
第2章 窯跡の調査 .....	7
1、概観	
2、窯跡の構造	
A, 焚口・燃焼部	
- 窯体内セクションの観察 -	
B, 焼成部	
C, 前庭部・灰原	
D, 灰原	
第3章 出土遺物 .....	13
1、概観	
2、遺物の出土状況	
・ 概観	
・ 窯体内検出遺物	
・ 灰原検出遺物	
・ 灰原A 1・2区、B 1・2区検出遺物	
・ 灰原C・D区検出遺物	
・ 丘陵裾採集遺物	
3、遺物各説	
・ 須恵器	
・ 瓦	
・ 中国磁器	
4、小結	
須恵器観察表	
第4章 考 察 .....	30
1、牛頭窯跡群の須恵器の化学的特性	
2、本堂3次窯跡出土須恵器について	
- とくに蓋杯の形状の変化について -	
あとがきにかえて	

## 巻頭カラー図版

- カラー図版1；出土遺物  
カラー図版2；遺跡全景、窯跡細部  
カラー図版3；窯跡全景、窯跡細部  
カラー図版4；灰原前庭部、前庭部灰層除去後

## 図版目次

- 図版1 位置図  
図版2 遺構実測図（窯体内セクションほか）  
図版3 遺構実測図（窯跡実測図）  
図版4 遺構実測図；灰原セクション実測図（縦断セクション、横断セクション）  
図版5 遺構実測図（前庭部ピット）  
図版6 遺物実測図（蓋）  
図版7 遺構実測図（蓋）  
図版8 遺構実測図（蓋）  
図版9 遺構実測図（杯）  
図版10 遺構実測図（杯）  
図版11 遺構実測図（杯）  
図版12 遺構実測図（杯）  
図版13 遺構実測図（蓋・杯）  
図版14 遺構実測図（皿・鉢・壺・盤・甕）  
図版15 遺構実測図（壺・高杯・杯）  
図版16 遺構実測図（甕・壺・ほか）  
図版17 遺構写真（窯跡全景）  
図版18 遺物写真（窯体内上半の凹地；前庭部灰層セクション）  
図版19 遺物写真（左側壁の状況；窯体近影）  
図版20 遺物写真（窯体たちわり跡上層面と下層面；同上細部）  
図版21 遺物写真（窯体内たちわりの状況C、D区；窯体内下層D区左右の状況）  
図版22 遺物写真（窯体内A区の状況；同上B区の状況；同上C区の状況）  
図版23 遺物写真（前庭部の状況；灰原縦断セクション）  
図版24 遺物写真（焚口、前庭部の状況；前庭部灰層除去後）  
図版25 遺物写真（蓋杯）  
図版26 遺物写真（蓋杯）

- 図版27 遺物写真（蓋杯）
- 図版28 遺物写真（杯・壺・高杯）
- 図版29 遺物写真（杯・壺・甕）
- 図版30 遺物写真（甕片他）
- 図版31 遺物写真（甕片他）
- 図版32 遺物写真（甕片他）

## 図 表 目 次

- 図1 表土除去作業
- 図2 窯体内セクションの設定
- 図3 地形測量
- 図4 窯体の検出
- 図5 灰原部分の検出作業
- 図6 灰原部分の検出作業
- 図7 窯体のたちわり作業
- 図8 写真撮影
- 図9 表土除去後の状態
- 図10 地形図
- 図11 窯体内横断セクション
- 図12 下層床面の状態
- 図13 区画設定図
- 図14 出土遺物拓影及び実測図
- 図15 出土遺物拓影及び実測図
- 図16 出土遺物拓影及び実測図
- 図17 K・Ca, Rb・Sr分布図
- 図18 蓋杯の形状の変遷（1）
- 図19 蓋杯の形状の変遷（2）
- 表1 遺構別、出土遺物一覧
- 表2 試料の分析値
- 表3 蛍光X線分析提供試料一覧

# 第1章 調査経過

## 1、調査に至る経過

上大利北土地地区画整理事業地内における埋蔵文化財の調査は、平成12年度から試掘調査を開始し、平成13年4月より発掘調査を実施しており、平成15年7月現在なお調査を継続中である。本事業に係る「調査に至る経過」については『牛頸梅頭遺跡群Ⅰ』大野城市文化財調査報告書第60集に掲載されるため、ここでは本堂遺跡第3次調査に至る経緯について記述する。

本堂遺跡第3次調査地は、大野城市大字上大利617番地にあたり、調査対象面積は2,000㎡である。当地は三兼池東側の丘陵の北端部にあたり、昭和23年の地形図と比較すると南側を内山緑地の開発、西側を三兼池の築堤により削平され、現在では三角錐状に丘陵が残っているのみである。このため遺構が存在するのは北東斜面のみと判断され、試掘調査に先行して実施した踏査では須恵器が採集されたことから窯跡の存在が推定されるにいたった。試掘調査は上大利地区画整理地内25次試掘調査として平成15年1月から2月にかけて実施し、窯跡1基を検出した。

試掘調査により遺構が確認されたことから、発掘調査の実施時期について上大利北土地地区画整理組合（以下「組合」）と協議を行った結果、早急なる着手・終了が求められた。しかし本市教育委員会では対応できない状況にあったため、大谷女子大学文学部文化財学科中村浩教授に協力を打診したところ快諾をいただいた。

発掘調査は平成15年3月3日より開始し、20日に終了した。その間、中村先生をはじめ大谷女子大学・琉球大学の学生諸氏には多大なる協力をいただいた。また岡山理科大学鳥居雅之教授には学生諸兄姉とともに考古地磁気年代測定を試料サンプリングを実施いただいた。各位に対し感謝する。

最後に調査費用や工事等の関係で極めて多大な協力をいただいている「北組合」と㈱大成建設の関係者をはじめ地元上大利地区の皆様にも感謝申し上げたい。

## 2、調査体制

発掘調査ならびに整理事業における調査体制は以下の通りである。

### 平成14年度発掘調査

大野城市教育委員会	教育長	堀内貞夫
	教育部長	鬼塚春光
	社会教育課長	秋吉正一
	文化財担当係長	舟山良一
	主任技師	徳本洋一
		石木秀啓
		丸尾博恵
		林 潤也
	主事	大道和貴
	嘱託	平島義孝
	島田 拓	

岸見泰宏  
上田 恵  
元吉知子

[発掘調査参加者]

小林敏子、坂本泰子、渡辺久美子、小林久美子、西村清子、貞包由紀子、広渡隆子、穴井和子  
立石律子、船越桃子、樋之口浩一、深野人美、大藪英美、仲前富美子、井口るみ子、原田敬子  
大海雅子、高木幸子、満富スエコ、吉嗣波津子、岩切ふえ、高木由佳、木村奈津子、織田徹  
松田和美、戸渡京子、野崎美智子、倉住孝枝、稲富久子、西堂将夫

大谷女子大学文学部文化財学科 考古学研究室 教授 中村 浩

大谷女子大学文学部文化財学科学生

徐笑梅（留学生・2回生） 蛭谷文絵、大野愛、河野恭子、神谷佳代、杉山嘉奈美、田淵智子、  
根橋みずほ、田中葉子、西野まなみ、細川由起子（1回生）

琉球大学学生

主税英徳（2回生）

岡山理科大学

教授 鳥居雅之

岡山理科大学学生

平成15年度整理作業

大谷女子大学文学部文化財学科 考古学研究室 教授 中村 浩

助教授 犬木 努

大谷女子大学文学部文化財学科

助手 中池佐和子

大谷女子大学博物館

学芸員 池田千尋・下村恭子

大谷女子大学文学部文化財学科学生

山田直子（3回生） 蛭谷文絵、大野愛、河野恭子、神谷佳代、杉山嘉奈美、田淵智子、根橋みずほ、  
中田葉子、西野まなみ、細川由起子、田峯、尾張、服部（2回生） 武田早香、千田佐和子、  
西谷千恵子、西村俊美、西脇由華、廣瀬祐美、本田昌代、三橋愛子、宮本真理子、村田智美、  
森重香織、山崎祐子（1回生）このほか、写真撮影については阿南写真工房の協力を得た。

（石木・中村）

### 3、調査の経過

調査は、3月3日に現地入りし、翌日の4日から調査を開始することにした。4日は天候にも恵まれ、早速丘陵部分の遺構検出作業及び地形測定の作業に着手した。周囲の状況から窯跡の存在は1基ないしは2基と考えられており、その位置もほぼ灰原の存在の部分から想定されていた。

窯の調査は、先ずは窯体内セクション、縦断及び横断の設定からはじめ、それらの記録作成後の除去、全体の検出作業へと順調に進展し、10日には窯跡の全容が姿を現し、写真撮影、実測作業と進んでいった。

この間、各種作業と平行して行った丘陵部分の地形測量については、初期段階での基準点の整合

性などで問題があり、図面の検討の結果、再度の測量作業とはなったが、その後は大きなミスもなく、調査範囲全域の測量図面が11日には完成した。

一方、灰原については、丘陵の清掃作業と平行して下方裾部のC、D区について、灰層および攪乱層の検出と除去作業を行い、最終的には縦断セクション、横断セクションの図面作成写真撮影で当該部分の調査は終息を迎えた。なおこれらのセクションの灰層などの堆積状況から、当該窯の操業は大きく灰原に灰や遺物を排出することが少なかったものと考えられ、少なくとも当該部分での観察からは、長期間の操業が行われていたとは考えがたい状況であった。しかし、丘陵上位と下位では、表土の流出状況も異なることから、下位の状況のみからは以上のように推察されたとしても上位の窯に近い部分の状況とは、異なった想定が可能という状況も見られた。すなわち丘陵の中位以下についての灰原の観察は、当該窯の操業と良好にリンクしていない可能性が濃いと判断される。

灰原上位の窯に近い部分については、調査日程の後半にあたる17日以降の作業となった。とくに当該部分については、遺物の包含は比較的少なかったが黒色灰層の堆積が比較的厚く見られた。従って灰原A、B区を上下に1、2として細分して遺物の検出作業を行った。これら灰層には若干の遺物が包含されていた。これらの除去後、地山面は凹凸の著しい面で、あるいはピット群がまとまって位置しているような印象を与えるものである。しかしこれらのピットが連続して何らかの構造物となる可能性をもったものは比較的少なく、大半は用途のない凹凸として理解するほかはなかった。窯の焚口に連続する大きく深いピットの存在は、そこでの操業にかかわる作業の存在を示すものとして貴重である。

14日から開始した窯体内に設定したたちわりは、17日にはほぼその内容の観察が可能な段階に達した。これによって窯の床面および貼り壁の重複状況が観察されるのであるが、当該窯では主として前者の床の重複状況が良好に観察することが出来た。窯床面下層の検討のため、設定したたちわりの横断面によって、上位からA区、B区として区分し、中央部の縦断たちわりを中心にして右、左と区分して精査を行なった。その区分は、例えばB区右床面、A区左床面下層などである。この精査によってD区の床面下層から比較的多くの遺物を検出することができた。これらは焼成段階の完了したものも含まれていたが、多くは所謂生焼けと分類される軟質のものであったが、表面に床面や側壁面が溶着したものが多く見られた。これらの資料は、当該窯出土須恵器の型式段階変化の微妙な段階に相当しており、その層位的な上下（前後）関連が明らかになった意義は大きいと考える。この点については後に詳述する。

窯体内部の床面検討が調査の最終段階に該当していたが、このほか丘陵裾部の遺構検出作業を行った。その結果は、いずれも窯の操業期間とは異なる新しい段階の遺物を伴うものであった。遺構の性格については、明らかにし得なかったが、窯跡とは一定以上の距離を隔てており、両者が関連していたとは考えられない。これらの検出作業が完了し、写真撮影及び実測図の作成が完了したのは、調査の終息段階であった3月19日であった。

以上の現地調査は、すべて3月19日には完了した。また丘陵下方の本堂2次遺跡部分についても併せて地形測量を行ったが、水溜まりなどの不可能な部分については除外した。これらの測量についても3月18日には完了した。現地調査の完了段階の19日には、出土遺物および調査機材の梱包を

行い、大学への発送準備を行った。遺物はいずれもコンテナに収納し、新聞紙などを間隙に積めて損壊を防止することとした。調査機材については、原則的に手持ちで帰ることとしたが、一部脚などについては嚴重に梱包の上、発送することとした。

これらの最終段階の作業と平行して、今回の調査でお世話になった各機関への挨拶回りをを行い、午後4時すぎにはすべてを完了することができた。

## ・日誌抄

3月3日(月) 晴れのち曇り時々雨

本日から調査の開始である。全員揃って大野城市市役所に挨拶に行く。

3月4日(火) 晴れ

窯跡のある丘陵部分の清掃作業。すでに重機によって表土が除去されていたが、木の根が所々に残っており、それらの除去と表土残存部の除去作業が主体となる。調査前の写真撮影全景遠望。平板による地形測量をはじめ。レベル移動についても丘陵頂上部分の原点杭から各レベル基準点に移動する。

3月5日(水) 曇り

表土除去作業を継続する。窯跡の輪郭の検出作業を行い、現状の写真撮影。窯体部分をA、B、C、D区に区分して作業をすすめることにする。窯体内セクションの設定。

丘陵下方部の灰原部分についても同様に区画割りをを行う。D区灰原の検出作業を開始する。遺物の出土は、灰原であることを考えると、やや少ないように思われる。

3月6日(木) 雨

現場の作業は出来ないため、市役所に移動して遺物整理作業を行う。また機材の点検も併せて実施。遺物には焼成の甘く軟質なものが多いことから、水洗には注意が必要である。

3月7日(金) 雨時々曇りのち雨

丘陵頂上部分から清掃作業を行う。遺物が少量出土した。灰原部分表土除去作業、一部については地山面を出していく作業。窯体セ



図1 表土除去作業

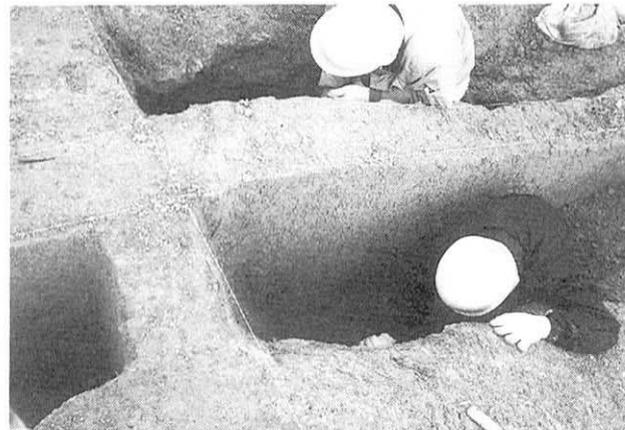


図2 窯体内セクションの設定



図3 地形測量

クッションを残しながら、C、D区の掘り下げを行う。午後から降雨のため作業を中止し、宿舎で遺物整理作業を行う。作業内容についてミーティング。

3月8日（土）曇り時々雨

平板測量の不備が確認されたため、再度作業を行う。窯体セクション残し、C、D区の掘り下げ。頂上部分の測量完成。さらに丘陵東部の測量作業。

3月10日（月）曇り後晴れ

窯体内縦断および横断セクションの除去作業。写真撮影、実測作業を平行して行う。窯体の検出作業。それぞれの区画に分かれて作業。地形測量続行。（HD3-2に設定、標高38、25～44m）平行して頂上部分の平板作業を行う。灰原部分の清掃作業。丘陵裾部の清掃および遺構検出作業。

3月11日（火）晴れ時々曇り

丘陵東側部分の地形測量作業を続行。平行して窯跡周辺の地形測量作業。窯体内部の清掃作業を続行。窯の焚口に近い部分の灰原A、B区について、さらに細分してA1、A2、B1、B2区として作業を進める。焼成部の精査および清掃作業。

灰原A2、B2区の検出作業。灰原D区断面セクションの作成。下方の集落遺跡の地形測量に余力の勢力を廻すことにする。

3月12日（水）晴れ

窯体検出作業の完了、写真撮影及び実測の準備作業。合わせて実測作業も開始。丘陵部分地形測量の図面の整合性についての確認作業。集落遺跡の地形測量続行。当該部分は25cmコンタである。

丘陵裾部遺構検出作業。多くの不整形なピットが検出されているが、これらが一定の纏まりを持って建物などの構造物を形成していた可能性は少ないと見られる。なお当該部分の右下部分で中国磁器（龍泉窯系青磁碗）が出土している。灰原横断セクション左、及び縦断セクション下の図面作成作業。

3月13日（木）晴れ



図4 窯体の検出



図5 灰原部分の検出作業



図6 灰原部分の検出作業

窯体内の床面上に残された須恵器の採集作業。焼成部の清掃作業と写真撮影、一部は実測図の作成を行う。窯体部にはたちわりの準備作業を行う。灰原A・B2区の黒色灰層の除去作業、下方から凹凸の著しい面が出現した。丘陵頂上部から全面的に清掃作業。集落遺跡の地形測量続行。丘陵裾部の遺構検出作業。

3月14日（金）晴れ

丘陵裾部の遺構検出作業及び実測図作成。窯横の黒色灰層の除去。A2区横の炭化材の除去と採取。たちわり作業続行。灰原A、B、C区の実測。集落遺跡の地形測量続行。岡山理科大学鳥居教授ほかによる考古地磁気試料採取作業。

3月15日（土）曇り

窯体内のたちわり作業続行。丘陵裾部の遺構検出作業及び実測図作成。集落遺跡の地形測量続行。

3月17日（月）曇り

灰原部分の遺構検出作業（地山検出）。窯跡のたちわり作業開始する。窯体D区床面が貼り床である可能性が濃いことが明らかとなる。写真撮影、実測。丘陵裾部遺構検出作業と平行して割付作業、実測作業。

3月18日（火）晴れ

窯体たちわり作業完了、写真撮影及び実測作業。丘陵裾部遺構面の検出作業及び実測。灰原面を含む全体清掃、全体写真撮影。下層床面の検討、随時写真撮影及び実測を行う。

3月19日（水）晴れ

丘陵裾部の遺構平面実測およびレベル採取作業。これらの遺構は大小等のピットが点在するもので、先にも推定したように、これらがまとまって何らかの構築物を構成するというものではないように思われる。なおこれらの遺構は奈良時代後半の須恵器や中世の中国磁器（龍泉窯系青磁碗）が採集されており、時期的にも異なるものと見られる。すでに岡山理科大学によって試料採取が行われたが、その後の検討によって検出された窯上下床面について地磁気測定用の試料採取。

3月20日（木）晴れ

灰原部分の灰層除去後の地形測量作業。窯体部分の実測図の検討作業。調査完了段階の写真撮影。作業用プレハブの清掃及び自転車の返却。遺物の梱包などの送付準備作業。

午後中村は関係機関への挨拶回りをを行う。

（細川・田淵・西野・蛭谷・中田・河野・杉山・大野）

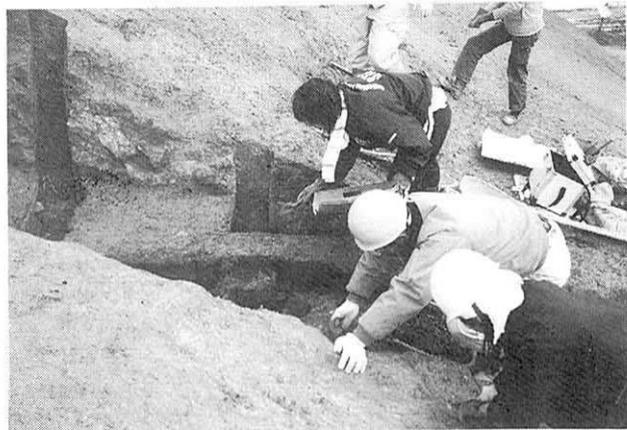


図7 窯体のたちわり作業



図8 写真撮影

## 第2章 窯跡の調査

### 1、概観

今回の調査では、1基の窯跡がその対象となった。丘陵自体は、後背面が開墾工事によって大きく削平されており、遺構所在面のみが丘陵の姿を残しているという状態であった。また丘陵の左右部分についても近年の築堤工事や開墾によって大きく削られ旧状は残していない。窯跡部分については堆積土が比較的厚かったせいか、調査開始以前の段階では明瞭に輪郭は確認されなかった。また灰原については丘陵中腹から下方に扇状に広がる黒色部分が確認されていたが、表面で採集された遺物は比較的少ないといえる状況であった。



図9 表土除去後の状態

また同じ丘陵裾部からは用途不明の土坑などが検出されているが、当該窯とは時期的にも隔たりがあり、これらについては本堂2次関連遺構と考えられたが、調査対象地域内でもあったので期間内に調査および記録作成を行った。いずれにしても当該窯跡とは時期的にも大きな隔たりがあり、直接関連する遺構ではないと考えられる。

### 2、窯跡の構造

#### A、焚口・燃烧部

焚口幅は、1.4m、傾斜変換点までの主軸上の延長は1.7m、床面傾斜角10度をはかり、床面と明らかに認められる部分は主軸上の延長0.3~0.4mの貼り床と見られる青色還元層である。なおこの床面の先端部分は一定ではなく凹凸が著しい。窯体の主軸方向は、N-48°-W、焚口の床面の標高は46.75m前後となる。

焚口の両側の側壁は貼り壁であり、いずれも赤色酸化層であり、両側ともに削平された痕跡が見られず完全な状態で残されていた。なおこれらの貼り壁の上には青く還元焼固した貼り壁が認められ、当該先端部分のみ酸化層である。

燃烧部と焼成部の床面が交叉する所謂傾斜変換点での両床面の角度は160度をはか

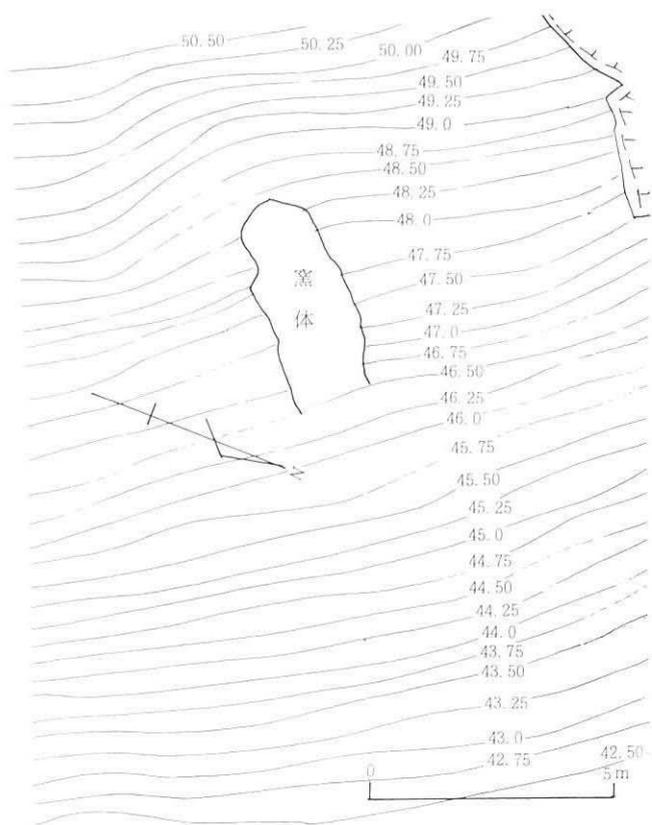


図10 地形図

り、燃焼部側の床面角度は32度である。この部分に設定した横断たちわりは、D-D'と縦断たちわりとである。それらの観察によると、D-D'では、まず最上層に8cmの灰層、続いて第2層には炭灰を少量含む粘質土層が6cm見られる。後者は間層であり、まったく床として用いられた痕跡のない部分で、故意に加えられた土層の可能性もある。その場合には、下層の窯の床面傾斜を緩やかにする目的で行われた行為と考えられる。

第3層は2cm前後をはかる赤色酸化層で、その下層には2cmをはかる黒色灰層が見られる。さらに1cm前後の黄色還元層、4cmの赤色酸化層と続く。またたちわりD-D'の下層床面には多数の須恵器が検出された。その大半は間層内部からの出土であるが、一部は床面に熔着気味のものも見られた。

間層以下は後述するが、明らかに上層の操業窯とは異なる先行する生産操業に伴う床および灰層と考えられる。なお側壁については、右側で1枚左側では剥落のため確認できない。また下層窯に伴うと見られる側壁は3枚で、還元気味の貼り壁が確認される。

焚口幅は、1.4m、傾斜変換点までの主軸上の延長は1.7m、床面傾斜角10度前後をはかり、床面と明らかに認められる部分は主軸上の延長0.3~0.4mの貼り床と見られる青色還元層である。なおこの床面の先端部分は一定ではなく凹凸が著しい。焚口の標高は46.75m前後となる。

#### — 窯体内セクションの観察 —

窯の中央部とでもいうべき部分であり、製品の焼成を主として行うための部分である。調査の初期段階に窯体主軸に対し直交する横断セクションと主軸に沿って設定した縦断セクションによって窯の最終段階の観察を試みた。まず横断セクションでは、表土層は既に除去されていたが、幅1.1m、深さ（厚さ）0.35メートルの範囲で下方に凹状に下がった層が確認される。この層は窯の天井の崩落によって下がったもので、床面から相当高い部

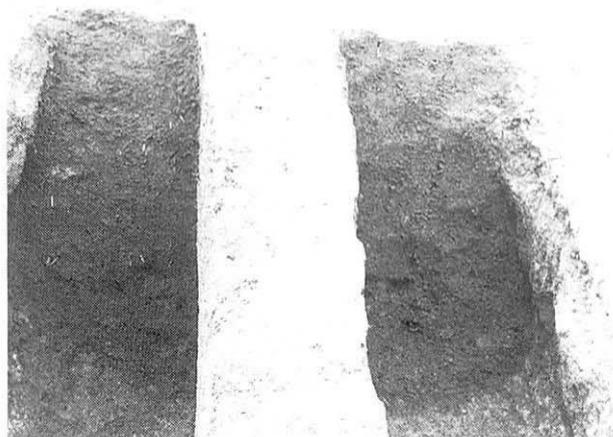


図11 窯体内横断セクション

分に見られるのは床面に後世の堆積土が多く見られたことによるものと考えられる。ちなみにこの土層は、7.5YR3/4暗褐色粘質土であり、周囲の地山と同質同色である。第2層は10~25cmをはかるレンズ状の焼け土を少量含む5YR4/6赤褐色の粘質土である。とくに当該部分に焼け土を含んでいるということは、この部分が外周部分に該当していたことを示すものであり、既述のように天井部までが比較の後世まで残されていたことを示す証拠となろう。なお第3層は、5~35cmをはかる窯壁片を含む5YR4/6赤褐色粘質土、第4層は0.8~3.4cmで多量の窯壁片を含む5YR4/6赤褐色粘質土からなっており、下方に至るほど壁片が少なくなっている。また床面直上の第5層は、5YR4/6赤褐色粘質土で、壁片などは全く含まれていない。状況から見て当該堆積土は、窯が使用されなかった期間に上層の堆積に先立ち窯体内に入り込んだものと考えられる。

一方、縦断セクションの観察を行うと以下のごとくである。

第1層は7.5YR3/4暗褐色粘質土が10cm、第2層は5YR4/6赤褐色窯壁片を大量に含む粘質土が15cm、最下層の第3層が5YR4/6赤褐色粘質土層が12cmそれぞれ観察できる。この堆積状況で壁ないしは天井の破片の堆積部位が床面直上でないということから、当該窯は使用されていない段階以降に廃棄されたものと考えられる。ちなみに使用中に天井が落下あるいは、放棄せざるを得なかったという場合には、床面直上にその痕跡たる壁片が認められるはずであるが、当該窯跡ではその痕跡が確認されていない。第1層と第3層、および第4層は全体に堆積状況が、やや凹凸は見られるがほぼ全域に認められる。しかし第2層の堆積は、水平距離にして約1m前後に認められたのみである。また傾斜変換点付近から下方には、壁片や置き台の破片と見られるものが大量に含まれる7.5YR5/6明褐色粘質土の堆積層が、5～6cm前後観察できる。

## B, 焼成部

窯の中央部とでもいうべき部分であり、製品の焼成を主として行うための部分である。主軸床面上の傾斜変換点から、先端残存部までの延長は2.37m、床面最大幅1.2m、最大傾斜角 $43^\circ$ をはかる。先端部では、奥壁のたちあがりは確認されておらず、現状検出部分からさらに上方に先端部が位置する。当該部位に設定したちわりは、A-A'、B-B'、C-C'の3箇所であり、C-C'は傾斜変換点付近に該当する。先端部からちわりB-B'の下方部分の中位までの床面上には、置台として用いられたと考えられる窯壁状のブロックが、ほぼ床面に横方向に3～4個が配置されていた。とくに当該部分の床面傾斜は56度ときつく、製品の焼成のための置き場所として、当該設備を行ったものと考えられる。なおそれらの置台には製品である須恵器の熔着した痕跡は殆ど確認

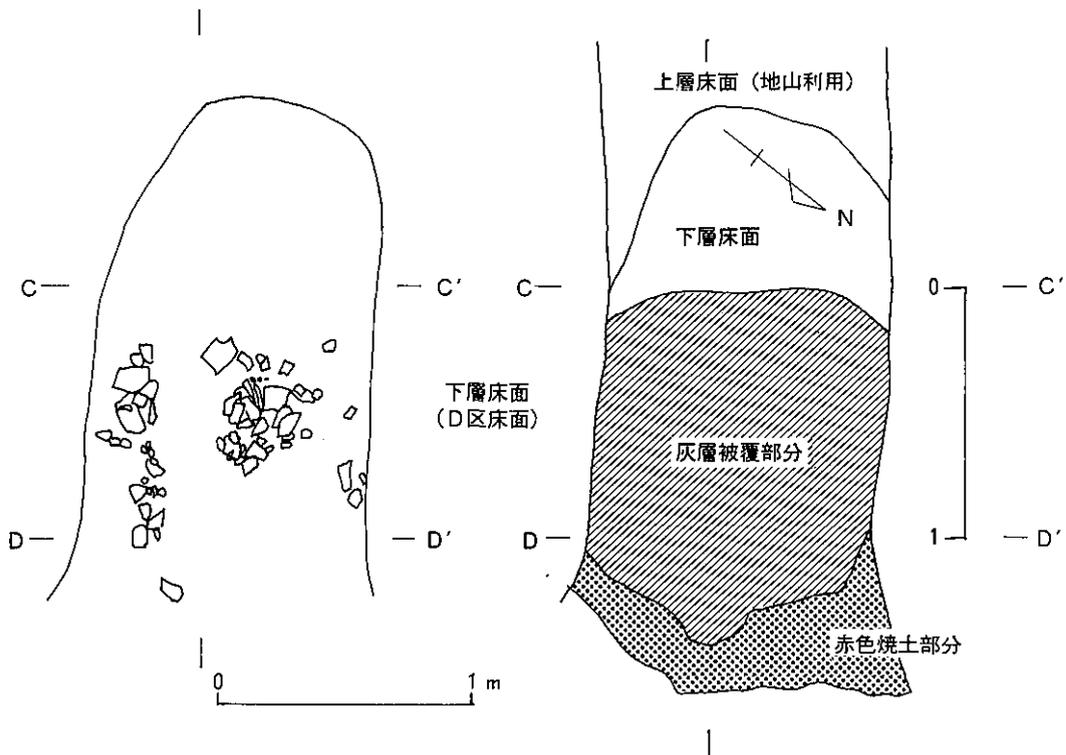


図12 下層床面の状況

できなかった。

以下に各たちわりの観察から検討することにしよう。まず窯の残存先端部から40cm部分に設定したたちわりA-A'から見ていくことにする。床は地山利用のもので、とくに貼り床などの行為は行っていない。しかし置台の設置のために部分的に凹面が見られる。側壁の右側では、内側の貼り壁と奥側の貼り壁の間に間層が見られる。すなわち内側の側壁は最終段階の焼成に伴うものであり、当該部分は明らかに貼り壁である。また間層を隔てた下層（奥）部の壁は地山利用のもので、貼り壁の可能性は少ない。

次に先端部から1.4m地点に設定したたちわりB-B'では床面の左側部分は地山利用のものが1枚見られ右側部分では一部に貼り床が1枚見られる。また置台による凹面が見られる。側壁では左側で0.8mのたちあがりが見られ、貼り壁は2枚を数える。右側ではたちあがりの高さ0.65mをはかり、2枚の貼り壁を確認できる。なお側壁の貼り壁はいずれも青灰色に還元焼固している。さらに外周には褐色に還元した厚さ2cm前後の層が見られ、さらに外周の厚さ8cm前後の赤色酸化層が続いている。当該たちわりと次のたちわりC-C'の間の床面上には置台および須恵器の甕片などが集中して見られた。この状況はおそらくは、床面の傾斜が当該部分で大きく変わるいわゆる傾斜変換点に近いことから上位の床面からずれ落ちたものがまとまって確認されたものと考えられる。

たちわりC-C'では、床面下層の様相が上位の2箇所のたちわりとは大きく異なっている。すなわち当該部分のたちわりでは、下層に主軸を同じくしてまったく異なる窯が構築されていることが明らかとなる。また上位の窯についても床面と床面の間に床として使用していない間層を伴っており、操業時にいくばくかの休止期間が存在した可能性を示している。以下に床面下層の状況から検討していきたい。最終床面は1枚で、その下層に2cm前後の赤色酸化層が間層として見られ、さらに下層に2～3枚の還元した床が見られる。床は砂質のもので、貼り床とは異なる。これらの床の下層には5cm前後の赤色酸化層がみられる。これらの床面あるいは上層の間層内部から、ほとんど遺物は検出されていないが、下層の間層内部からは遺物が採取されている。なお当該上層部分の窯の床面基底部から上位に50cmでの幅は最大1.5m前後となり、最終床面の幅1.1mよりかなり広くなっている。すなわち下層窯では幅の大きなものが、上層では幅が狭められてきたという経過を見ることができる。側壁は左側部分ではいずれも上層の窯に伴うと見られる貼り壁が3枚と外周の還元層および酸化層が見られる。さらに外周（下層）に床面の重なりが5枚あり、最下層が地山利用であることを除くと、いずれも砂質で青灰色に還元している。側壁については左側では上層窯によって削られており、外周のみの残存となっている。また右側では厚さ2cm前後の貼り壁が1～2枚みられる。なお当該壁は床面の下層に連なっており、このことから下層窯については補修がまず側壁から行われたことを示している。

一方、縦断たちわりでの観察所見では、先端部から2m前後の部分から、下層の窯が確認できる。上層の窯の床面は地山利用のものが1枚傾斜変換点付近まで観察され、たちわりC-C'から40cm部分から黒色灰層に連なっている。灰層は徐々に厚さを増していき、焚口付近では暑さ10cmをはかる。また下層窯の状況は、先端部分から大きくほぼ45度前後の角度で下がり、先端から約30cmで緩やかな床面となる。おそらく当該部分が下層窯の傾斜変換点と考えられる。なお灰層は、傾斜変換

点から10cm前後の部分から始まり前方へと続く。

最下層の窯の床面は傾斜変換点から1 mまで、少なくとも1枚が見られ、最大2枚を数える部分もある。なお当該床面の上位には多くの焼成途上段階の須恵器が残されており、貴重な資料を提供することになった。

### C,前庭部・灰原

焚口前方に広がる前庭部分には、大量の黒色灰層が堆積しており、本来の前庭部分はまったく隠れていた状態であった。焚口から20cm前後先端の灰原部分の幅は、窯体床面とほぼ同じ1.45 m、さらに1メートル前方では2.07 m、またさらに0.6メートル部分では1.76 mといずれもほぼ近似する幅で推移している。たちわりE-E'での第1層は、7.5YR3/2黒褐色灰層で10~30 cmをはかる。またたちわりF-F'では、第1層は、先のたちわりと同じく7.5YR3/2黒褐色灰層で約20 cm、第2層は焼土および炭灰を含む5YR3/2黒褐色灰層が30 cm堆積している。これらの灰層からは比較的須恵器の出土が多く見られた。なお当該窯での前庭部分は主軸上の延長で約2.7 mをはかる。具体的には窯の焚口から20 cmあまりで、後述するピットに入り、その先端部までがこの部位に該当するものと考えた。

当該部分の灰層を除去すると、ほぼ上層部分で見たのと幅が同じ溝状の掘り込みが確認された。さらに、たちわりF-F'から下方部分には、凹凸が著しく、多数のピットが重複して検出された。とくにF-F'から40 cm部分から大きく楕円状に掘り込まれており、先端部は3.3 m地点にまで及んでいる。またこの楕円形ピットの幅は1.5 m前後、深さは最大は灰原上面から70 cm前後をはかった。内部にはいずれも黒色灰層が充満しており、表面上は灰原が細長く伸びているような状態であった。楕円形のピットの右側には長軸1.5 m、短軸1 m、深さ50 cm前後をはかる方形に近いピットが見られた。また当該部分のピット群は、たちわりF-F'から3.7 m部分で大きく落ち込み、丘陵斜面に沿って下がっている。さらに先に見た溝状の凹面は、この先端部から大きく扇状に幅を広げており、たちわりF-F'から5 m部分で幅3.3 mをはかる。

### D,灰原

前庭部分の灰原とは区分できない関係にあるが、当初から灰原として調査していた部分について記述していく。灰原の始まりのポイント杭は、たちわりF-F'より前方に50 cmの地点である。灰原に設定した縦断セクションの起点は、ポイント杭であり、横断セクションは、そのポイントから下方に水平距離8 m地点で主軸に直角に設定している。

縦断セクションでは、窯に続く2層の灰層が見られるが、その下層に7.5YR3/2黒褐色灰層の堆積が15 cm前後認められる。また上位には窯壁片、焼土、炭灰を含む7.5YR5/6明褐色灰層および、窯壁片、焼土、炭灰を含む7.5YR2/3極暗褐色灰層の16 cm前後のブロックないしは堆積層が見られる。後者の灰層はポイントから5.3 m地点まで厚さ5~10 cm程度で続く。さらにこの層の下層には20~30 cm前後をはかる7.5YR5/6明褐色粘質土層が、さらに4 m地点から7.5YR 4/4褐色粘質土層が最大50 cm見られ、7.3 m地点まで続いている。これらの層の中には灰層は含まれていない地層であるが、一方では地山とは異なる堆積層である。この層の存在については、窯の築造段階に窯本体部分から排出した土砂を前方部分に配置したものと考えられる。

体部分から排出した土砂を前方部分に配置したものと考えられる。

この地点付近に横断セクションが設定されており、堆積層は大きく木の根などによって攪乱されている。とくに灰層は10cm前後の表土下層に10～40cm前後のブロック状の堆積層となり、上位で見られたような整合性のある堆積層は見られない。当該横断セクションから丘陵の下方に向かっての堆積状況はこの傾向が強い。わずかな灰の痕跡が含まれている層は、横断セクション部分から5.1m部分まで続いているが堆積層の暑さは5cm以下となる。また丘陵上位で見た窯体内からの排出土砂と見られる土層についても当該セクションでは確認できない。

横断セクションは、灰原の左右への広がりを確認するものである。中央から左側には5.4m部分まで炭灰を含む層が認められる。中央部では4層が確認できる。すなわち上位から炭灰を含む7.5YR6/1黒灰色粘質土、炭灰および遺物を含む7.5YR6/1黒褐色粘質土、少量の炭灰を含む7.5YR5/6明褐色、多量の炭灰を含む7.5YR6/8橙色粘質土で構成されている。とくに上層は攪乱が著しく、下層の灰層については、それが少ないように見られる。また左側の端部に近づくにしたがって、上層の攪乱が著しく、わずかにブロック状に最下層に黒色灰層を確認するのみである。

一方右側部分の横断セクションでは、左側で見たほどの攪乱状況ではないものの、木の根による層の乱れなどが随所に見られる状況であった。なお当該セクションを構成する主たる層は、4層である。すなわち上位から炭灰を含む7.5YR6/1褐色粘質土、炭灰および遺物を含む7.5YR6/1黒褐色粘質土、少量の炭灰を含む7.5YR5/6明褐色、多量の炭灰を含む7.5YR6/8橙色粘質土で構成されており、部分的に7.5YR2/1多量の炭灰を含む黒色灰層がブロック状に含まれている。なお右端では第3層の灰を少量含む層が中央から5m地点で消えている。

以上の灰原の状況から、当該窯に伴うその規模は、左右の拡がり最大で10.3m、丘陵斜面の縦方向の拡がり、焚口から17.4m前後をはかる。

## 第3章 出土遺物

### 1、概観

今回の調査で出土した遺物は大半が須恵器であり、一部中国磁器（龍泉窯系青磁碗）や土師器（土師質土器）、銅製品などが見られるが、きわめて少数であり、当該窯に伴う遺物ではないと考えられる。須恵器については、その多くが本窯で焼成された製品である。なお出土須恵器のすべてが本窯製品ではない。すなわち灰原裾部での採集された須恵器に時期のまったく異なるものが含まれており、これらは当該窯の遺物とは考えられないからである。また地区別に見た遺物出土量は、表1のごとくである。

表1 遺構別、出土遺物一覧

出土場所	蓋杯(蓋)	蓋杯(杯)	蓋杯不明	蓋	杯	その他	甕	不明	瓦	小計
窯体内										
埋土中			1		4		2	7		14
最終床面D			1	7						
最終床面E	78			3	2					
最終床面			1	7	17	壺1	35	262		
たちわりD	32	44	85				9	2		
たちわりC	6	7	13			壺2	6			
たちわり	12	7					14	41		
D下層右床4	19	133	31	72		201				
D下層左床	73	114					4			
灰原	36	59	89			8	187	93		
A灰原	19	2	3				1			
A-1灰原	48	67	43			壺1 4	41			
A-2灰原	47	65	48			鉢2、高杯1	172	72		
B-1灰原	3	7	12			壺1	6	2		
B-2灰原	24	32	73			壺5	63	5		
C灰原	17	14	13		12	鉢11、	110		2	
D灰原	78	42	66		2	鉢1、高杯2	354	223		
表面採集	22	22	63				40	53	2	
丘陵裾遺構	4	4	35		3	鉢1、平瓶1	3	35		
試掘調査	5	33	6			壺2、高杯1	36	6		

(単位は片)

### 2、遺物の出土状況

#### ・概観

今回の調査で遺物が検出された部分は、窯体内、灰原の2箇所である。とくに窯体内では上層の床面および下層の床面という時期的な推移を確認するにはもっともふさわしい部位からの検出であった。また灰原部分からの最終遺物は丘陵上位の比較的攪乱の少ない部分でのものと丘陵裾部に近い攪乱が著しい部分での採集遺物がある。いずれも遺物としては貴重な資料であり、それらの検出状況の確認を行いながら検討を行わねばならない。なお遺物の検討は後に記述することとし、ここではそれらの検出状況と各遺物について記述する。

#### ・窯体内検出遺物

調査の最終段階、たちわりを設定した結果、下層に主軸を同じくする窯が確認された。たちわりの横断面によって窯体内をA区、B区、C区、D区、さらに縦断たちわりを中心に右、左と各々区

分して各部分から出土する遺物を確認しながら取り上げていった。以下、それら区画ごとの検出遺物について記述する。なお調査開始当初では、以下に示した区画設定を行っていなかったこともあり、窯体内床面上あるいは窯体内埋土内と注記して取り上げた遺物も見られる。これらの遺物はいずれも最終段階の本窯の操業に伴うものであり、後に最終床面の図化した段階には含まれていないものである。なおたちわり設定後は、以下に示す窯体内の区画設定を行って調査を進めた。

- ・ A区、B区、C区——この区画は、A区、B区では床面が地山利用のもので、とくに置き台とともに検出されたものを除いては、下層の遺物は見られない。またC区とした範囲からも置き台など最終焼成に伴う遺物の検出は見られたが、とくに図化するほどのものは見られなかった。

- ・ D区床面および下層面——注記にはD区下層床面右あるいはD区下層床面左としているものである。また左右いずれか判断しがたいものについてはD区下層一括としたものもある。この区画は最も遺物が多く採集された部分である。とくに床面の下層の灰層から下層窯の焼成に伴っていたと見られる遺物が大量に検出された。すなわち当該区画からの遺物が下層窯の生産段階を示しており、明らかに上層の段階とは時期差が見られる。とくに当該窯がもっとも先行して操業していることは、その層序関係からも明らかであり、その検出遺物は本窯生産開始段階の遺物として理解される。

#### ・ 灰原検出遺物

焚口部に付属して灰原が存在したが、調査の手順としては丘陵裾部から進めていった。したがって窯体主軸方向を丘陵に沿って下げ、そのほぼ中位に横断面セクションを設定することにした。従って灰原の区画は、焚口に向かって左をA区灰原とし、右をB区、その下方をC区、A区の下方をD区とした。

#### ・ 灰原A1・2区、B1・2区検出遺物

やがて調査の進行により、A、B区の灰原を上下に二分する必要が生じ、上方をそれぞれA1、B1区とし、下方をA2、B2区とした。とくにこれらの区画の下層には前庭部ピット設定されており、灰の堆積層も比較的厚く残っていた部分であった。なおこれらの区画では上方部分がより遺物の包含が多く見られた。

#### ・ 灰原C・D区検出遺物

通常に丘陵斜面に拡がっている灰原である。調査による所見では、かなり攪乱を被っており、純粋な灰層の残存状態は極めてよくないものであった。また丘陵裾部の灰原延長部分からは、明らかに当該窯の製品ではない新しい時期のものが採集されている。これらについては近接地域に窯が所在したものか、あるいは他所から運び込まれたいわゆる搬入品かのいずれかであろう。丘陵下位に

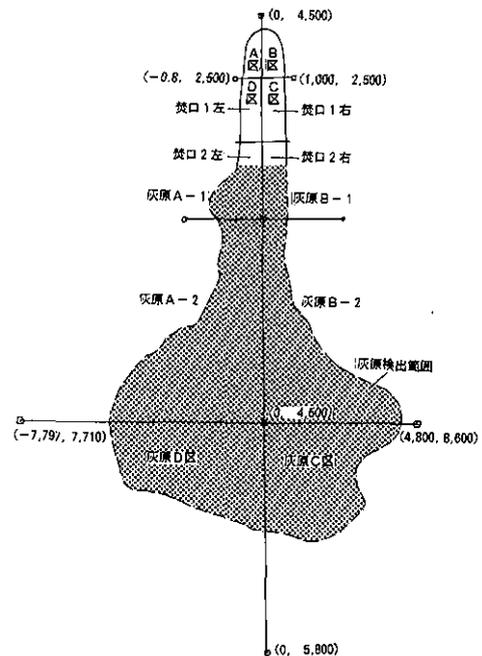


図13 区画設定図

本堂2次遺跡が展開しており、また近接地の状況から窯の存在が確認できないことから、後者の可能性が濃いと考えられる。

#### ・丘陵裾採集遺物

本窯製品とは異なる時期の須恵器および中国磁器（龍泉窯系青磁碗）などが表面採集されている。それらの多くは試掘調査での出土遺物が多いが、今回の本調査でも遺物が出土している。それらについては、既述のごとく本窯製品ではなく、他所からの搬入品と見るのが妥当であろう。なお丘陵下方部分については、窯の調査と平行して精査を行ったが、正確の明らかにできない土坑およびピットがいくつか検出されたに過ぎない。また中国磁器に関連する遺構については、今回の調査では確認できなかった。今後本堂2次遺跡との間に見られる帯状の地域で関連遺跡が検出される可能性もあろう。

### 3、遺物各説

#### ・須恵器

今回出土した須恵器のうち窯体内遺物については、床面の上下関係や、灰原などの出土状況の検討から時期的な前後関係を理解する重要な資料を提供することになった。とくに当該出土須恵器の型式編年上の位置が微妙な段階であり、一層その重要性を増すことになった。この段階は、近畿地域の陶器窯出土須恵器の検討結果からは、Ⅱ型式6段階からⅢ型式1・2段階に相当するものである。この段階では合子形の蓋杯の蓋と身が逆転するという大きな画期に該当する。さらに合子形蓋杯は逆転してさらに蓋の中央部につまみが貼付され、両型式間の蓋杯は、ほとんど同形であるのに、まったく異なる形を構成しているかのようである。

ともあれ本調査で知りえた所見について、各器種毎に、以下にその観察と検討の結果を記述することにする。

#### 蓋

蓋については、杯身となる可能性も含まれているが、本稿では図示した形態については、蓋として分類して記述する。ただし類例の追加によっては杯身となることもお含みいただきたい。

#### 蓋A（図版6—3・8・10）

天井は低く平らに近い形状を呈し、口縁部はなだらかに端部にいたる。端部は丸く仕上げられている。天井部外面には大半に回転ヘラ削り調整が施され、内面ほかは回転ナデ調整によって調整されている。出土位置がたちわり中、灰原あるいは前庭部灰層からであるので、比較的初期段階の生産に関する製品と考えられる。いわゆる合子形の蓋杯を構成する蓋と見られる。なお扁平な状態のもの（8・10）とやや口縁が高いものがある（3）が、基本的には同じ形態と見てよいだろう。杯Aとセット関係をなすものと考えられる。

#### 蓋B（図版6—1・2）

天井は比較的高く、口径も大きい。天井はわずかに丸みを持つが平らに近い。口縁部はほぼ垂直に下がり、端部近くで外側に曲げられ丸く仕上げられている。天井部外面には大半に回転ヘラ削り調整が施され、内面ほかは回転ナデ調整によって調整されている。出土地がたちわり中、下層から

のものであり、当該窯での初期操業段階のものである。Aと同様、杯AないしはBとセット関係を持っていたものと考えられる。

#### 蓋C (図版6-4~7、9、11~13)

口径が小さく、器高は比較的高い。天井はわずかに丸みを持つが平らに近い。口縁部は垂直気味に下がるもの(4・6)となだらかに下がるもの(5・7・9・11~13)があり、端部は丸く仕上げられている。天井部のヘラ削りの範囲は前二者に比較して少なくなっている。

しかし出土部分が床面下層からのものが含まれており、時期的には前二者と平行するものと見られる。

#### 蓋D (図版7-1~14、16、22~24)

口径は小さく、天井部につまみを貼付し、両側の端内部にはかえりを伴う形状のものである。つまみには菱形のものと乳頭状のものがある。とくにこの形状のものでは、かえりの部分が両端からさらに下がっているものと、内部に含まれてしまうものがある。その差異は、従来から時期差とみられていることから、当該形状には加えず別の形状とする。灰原や床面下層の出土が確認されていることから時期的には初期操業段階からわずかに後の段階に相当すると見られる。

#### 蓋E (図版7-15、17~21)

形状はほぼ蓋Dと同じであるが、かえりの高さによってDとは区別することができる。Dに比較して時期的にわずかに後出段階と考えられるが、ほとんど差異を認めないものとしてよいほどで、出土位置からは明確には区分できなかったのが実状である。

#### 蓋F (図版8-5~21)

天井部中央に扁平な宝珠つまみを貼付する。天井は比較的高く丸みを持つ。口径は大きく、両端から内側に比較的最長い断面三角形のかえりを伴う。(10・13・18・20)なおかえりが細くほぼ垂直に下がるもの(7・8・11・15・16・19・21)と内側に下がるもの(5・6・9・12・14・17)がある。これら三種の形状は、細かな手法の差と見ることができるだろう。ちなみに第一者のかえりは両端を後補したもので、ほかの二者はかえり部分を貼付したのも含まれている。出土地域は、窯体内の最終床面上のものが見られ、当該窯出土遺物ではもっとも新しい段階のものとして大過ないだろう。

#### 蓋G (図版8-1~4)

形状はほぼFと同じである。わずかにかえりが両端より上方に位置するものである。なお当該かえりの位置関係のほかには差異を認めがたい。出土場所についてもほぼ同じであり、時期的に同じと見てよいだろう。

#### 蓋H (図版13-16・17)

口径の大小が見られるが、形状には差異は見られない。いずれも灰原周辺からの出土であり、最終段階の操業には伴わない。

#### 蓋I (図版13-1~5)

天井部は低く平らで、中央に扁平なつまみを貼付する。天井部外面は2/3に回転ヘラ削り調整が行われ、内面にはナデ調整が、ほかはいずれも回転ナデ調整が行われている。天井部両端は下側

に曲げられている。焼成はいずれも良好であり、出土位置は灰原中位から裾部にかけてとその周辺である。

## 杯

### 杯A (図版9-1~12、5-1~9・20)

たちあがりは短く内傾して内上方にのび端部は丸い。受け部は短く外上方にのびるもの(2・6・7・9~12、5-1~9)と、ほぼ水平にのびるもの(1・3~5・8)がある。いずれも口径は小さく、比較的器高も低い。底部外面は回転ヘラ切りでほかは回転ナデ調整を行う。大半の破片が焼成不良である。出土位置は、いずれも窯床面下層が多く、一部灰原からのものも見られる。

### 杯B (図版9-13~15、5-10~19)

杯Aと形状は同じであるが、たちあがりが高く、両端から下方に位置するものである。出土位置は先のAより、わずかに上層である。

### 杯C (図版11-1~9・14・15・17・19)

口径は小さく、底部は比較的深く丸みを持つ。口縁部は「S」字状に上外方にのび端部は丸く仕上げられている。底部外面には回転ヘラ削り調整が行われている。口縁部と底部の境に稜を認める。出土位置は床面下層が多く、初期段階の操業に伴うものと考えられる。なお蓋Cにも近似する形状であり、杯ではなく蓋であった可能性も捨てきれない。なお当該形状のものと杯CあるいはBとセット関係となる可能性を有する。

### 杯D (図版11-10・13・16・18)

口径は杯Cと同じく小さい。底部は比較的深く平らに近い。口縁部はなだらかに外上方にのび端部は丸く仕上げられている。杯Cと近似するが時期的にはわずかに新しい。

### 杯E (図版12-1~17)

口径は小さく、底部は平らで比較的深い。口縁部は垂直気味に立ち上がり、端部を丸く仕上げるもの(12-1・4・8・9・12)と、なだらかに外上方にのび単部が丸いもの(2・3・5~7・10・11・13~17)がある。またこれとセット関係となる蓋は、蓋DあるいはEである。なお蓋の可能性もあるものも含まれている。(16・17)

### 杯F (図版13-15、14-10~18)

比較的高い高台を底部に伴う杯である。杯の口径は比較的大きく、口縁部は内彎気味に内上方にのび、端部は丸く仕上げている。口縁部の形状や高台の貼付角度などにわずかな差異は認めるが、ほぼ同じ形状と見てよいだろう。つまみとかえりを貼付する蓋F・Gとセット関係をなすものと考えられる。高台で囲まれた底部にヘラ記号が見られる。

### 杯G (図版14-6~14)

底部は比較的深く平らで、両端に高台を貼付する。なお当該形状のものは、いずれも本窯の製品とは考えられない。口縁部の形状に大きく外彎するもの(6)短く外上方にのびるもの(8・9・11~13)長く外反するもの(10・14)などがあり、時期も一定していない。

## 高杯

### 高杯 (図版14-3~8)

杯部はわずかにふくらみを持つ平板状をなし、両端で垂直に曲げている。口径には大小がある。(3・4)脚は基部太く、外彎して外下方に下がり、端部で下方に曲げられている。脚に短いもの(6・7)と長いもの(8)さらに小型のもの(9)がある。

## 壺

### 短頸壺A (図版14-1)

口頸基部太く、頸部は外上方になだらかにのび、端部は丸く仕上げられている。体部は最大径を上位に求める球体をなし、底部は丸い。

### 短頸壺B (図版14-2)

口頸基部太く、頸部は外上方になだらかにのび、端部は丸く仕上げられている。体部は最大径を中位に求める球体をなし、底部は欠損。

### 長頸壺 (図版16-12)

小型の長頸壺である。口頸基部細く、外反する頸部は端部付近で、さらに外方に曲げられ端部にいたる。頸基部以下を欠損。

## 瓶

### 平瓶 (図版16-9・10)

平瓶の口頸部の破片である。基部細く、外反して外上方にのび、端部を丸く仕上げるもの(9)と端部付近で内側に曲げ、端部は内傾する面をなすもの(10)とがある。前庭部および灰原での出土であり、当該窯の製品であることは疑えない。

## 甕

広口壺と形状が近似しており、いずれに分類しても可能であろうが、本稿ではこれらを甕として記述する。

### 甕A (図版16-1)

口頸基部太く、なだらかに外反する頸部は端部で外傾する面をなす。なお頸中位外面に沈線1条を巡らせる。灰原の出土遺物である。

### 甕B (図版16-2)

口頸基部太く、なだらかに外反する頸部は端部で大きく肥厚させ、段をなす。灰原の出土遺物である。

### 甕C (図版16-3)

口頸基部太く、なだらかに外反する頸部は端部で大きく肥厚させ段をなす。体部は頸部と「く」の字に曲げられ、外面には平行叩き、内面には円弧叩きを施す。灰原の出土遺物である。

### 甕D (図版16-4・5)

口頸基部太く、なだらかに外反する頸部は端部で大きく段をなす。体部は頸部と「く」の字に曲げられ、外面には平行叩き、内面には円弧叩きを施す。灰原の出土遺物である。

### 甕E (図版16-6・7・8)

口頸基部太く、なだらかに外反する頸部は端部で大きく肥厚させ段をなして端部にいたる。体部は頸部とゆるやかな「く」の字に曲げられ、外面には平行叩き、内面には円弧叩きを施す。灰原の

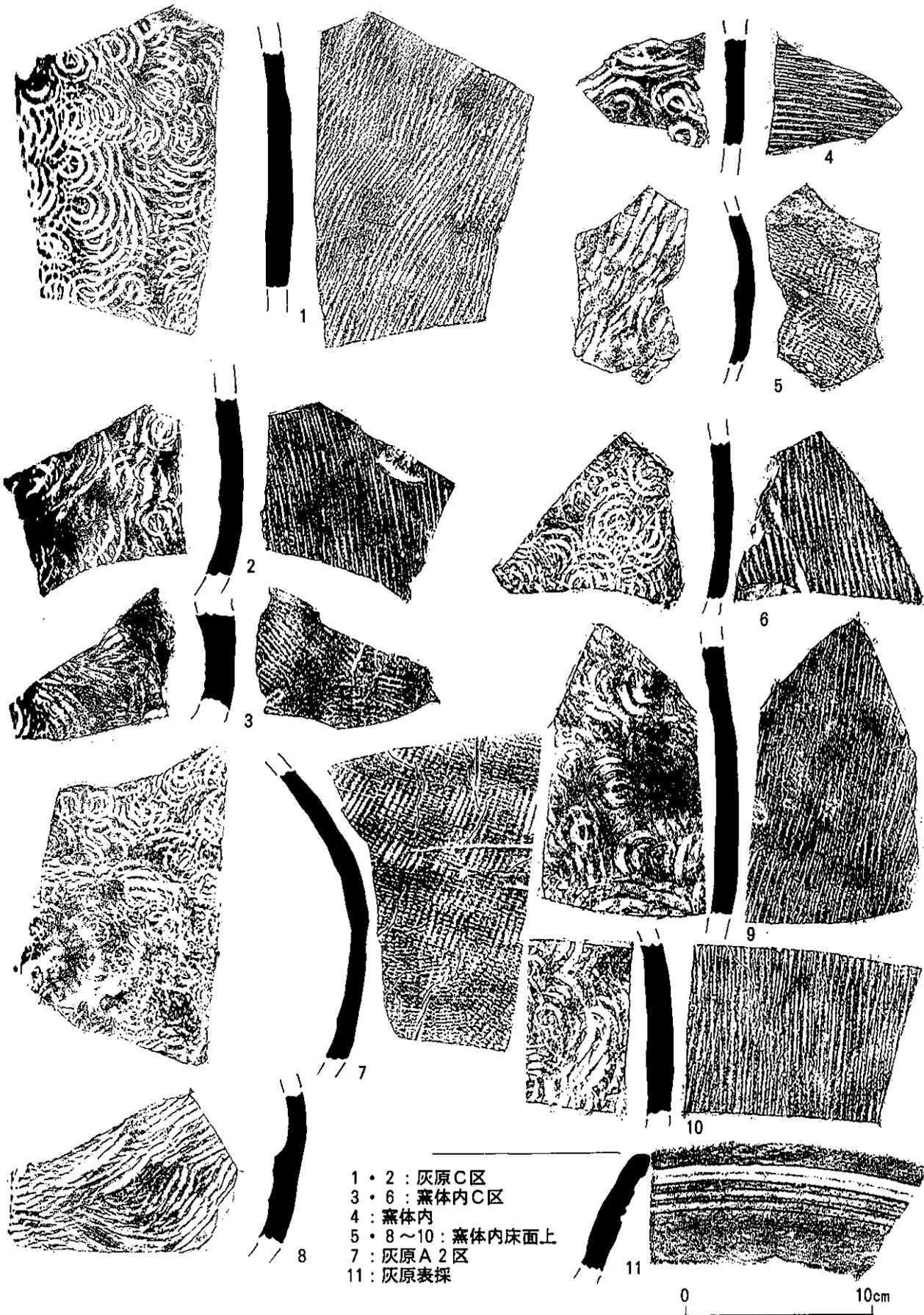


图14 出土遺物拓影及び実測図(壘1)

出土遺物である。

### 甕 (図14・15)

本窯からは異なる施文原体による叩きが施されている体部片が若干検出されている。とくに外面では平行叩き及び格子叩きの他に線刻状の平行叩きがみられる。また内面では、同心円、円弧の叩きの外に円弧がくずされたような平行叩きがみられる。同心円、円弧叩きは、それぞれ部位によって施される場所が異っている。なお円弧の変形叩きや平行叩きに伴う外面叩き文様はごく一般的な平行叩きである。

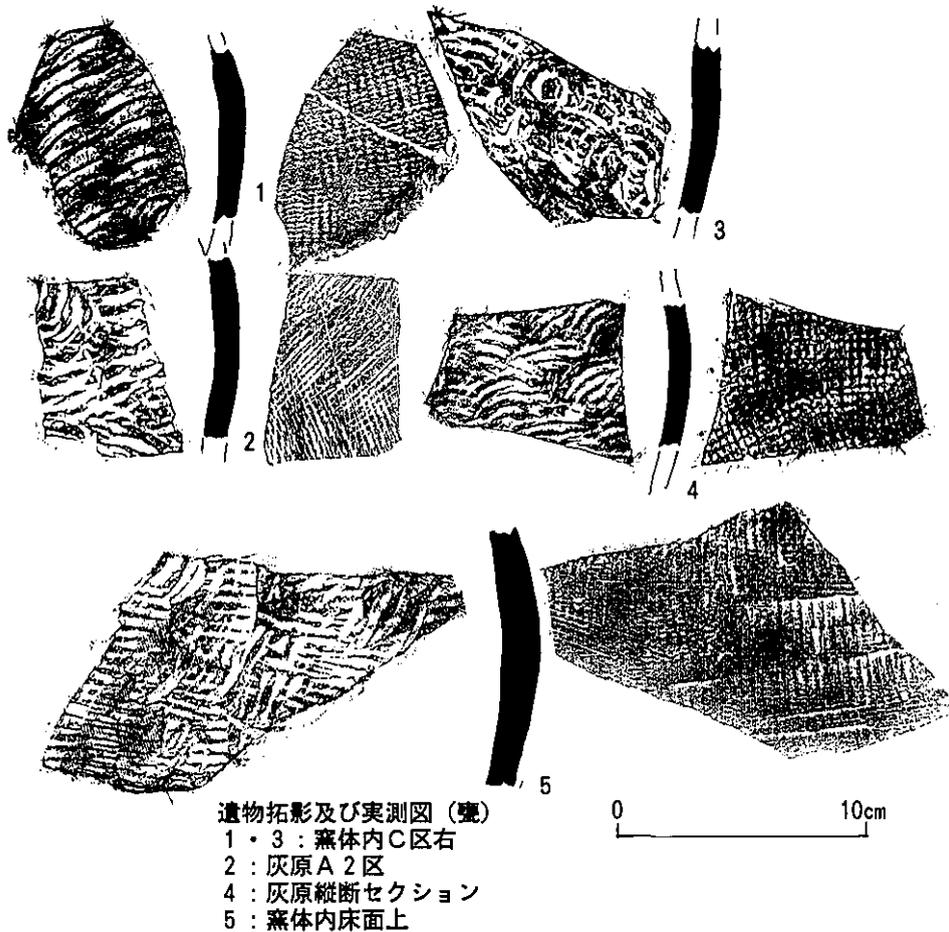


図15 出土遺物拓影及び実測図 (甕2)

### かまど

#### かまど状土器 (図版16-13・14)

内側に傾斜する体部の下位に把手を貼付したかまど状の土器である。焼成は甘く軟質であり、火の使用を伴う用途の土器としては適切な状況と考えられる。なお窯床面下層および灰原から出土しており窯の操業期間と重複していることだけは確認できるが、当該窯の製品であるかどうかは明らかにできない。

### 置台

#### 置台状土器 (図版16-11)

蓋杯の中央部に大きな円穴を穿った形状のもので、窯内の焼成部で用いられた製品の置台の可能

性が濃い。同様な形状の遺物はほかにも若干数出土している。

・瓦

平瓦(図16)

焼成が甘く軟質な瓦である。凸面には縄目文様が施され、凹面には布目が認められる。細かな破片であり、その全容は推定できない。また当該窯での焼成品の可能性は極めて少ない。同趣のものが他に1点採集されている。

・中国磁器

青磁A(図16)

復元口径15.8、残存高6.0cmをはかる中国青磁碗(龍泉窯系)である。内面には花卉文様が印刻されている。同一個体の破片の他に3点と他の製品の可能性のある細片1点が採集されている。丘陵裾部に展開した遺構群に伴う遺物と考えられる。

#### 4、小結

以上、今回の調査で出土した遺物について記述を進めてきた。窯跡という遺構の性格上、須恵器がその大半を占めることは当然である。しかし当該遺構の立地する丘陵裾部には異なる遺構群が所在しており、これらに伴う遺物も若干見られた。

いずれにしても、須恵器の形状は型式編年上重要な部分に位置するものである。幸い床面の上下に区分される箇所や灰原、前庭部分など前後関係を把握しやすい状況があった。これらの点にも注目して後の考察部分でも検討することになっている。

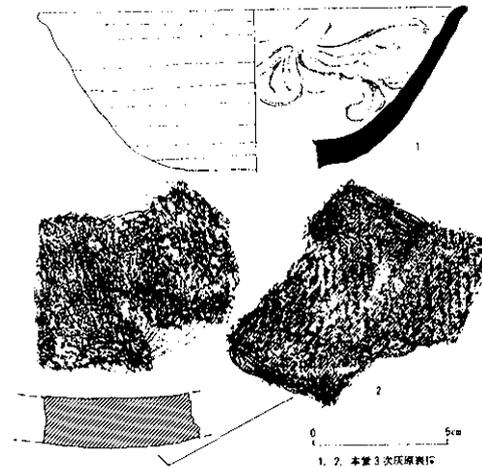


図16 出土遺物拓影及び実測図

# 須 恵 器 観 察 表

## 凡 例

- 1、本表は、本堂3次窯跡及びその周辺から出土した須恵器の観察記録である。
- 2、標記の器種は、蓋杯の場合は従来の慣例に従って蓋、あるいは身の区別を行っているが、必ずしも本稿の通りになるとは限らない。即ち蓋としたものが杯身として使用されている可能性もあり、本稿通りに用いられているものもある。
- 3、甕としたものは広口壺と分類されていることがある。本稿では甕に統一しているが、必ずしもこの呼称を強要するものではない。
- 4、本記述で用いた手法の標記は、いずれも『陶邑』Ⅰ、Ⅱ、Ⅲおよび『牛頸ハセムシ窯跡群調査報告書』などで用いたものである。
- 5、本表の作成は、中村の指導のもと下村恭子（博物館）および文化財学科学学生（久保、細川、蛭谷、田淵、大野、河野、西野ほか）が担当した。
- 6、胎土の色調は「標準土色帖」を用いて、2名以上の合致した色調を記述した。

器種・法量	図版番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋A 口径12.9cm 器高 3.9cm	6-3 (8・10)	天井は低く平らに近い形状を呈し、口縁部はなだらかに端部にいたる。端部は丸く仕上げられている。やや口縁が長い	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面には大半に回転ヘラ削り調整が施され、内面ほかは回転ナデ調整によって調整されている。	焼成甘く軟質 胎土やや粗 外面 5Y8/1 灰白 内面 5Y8/1 灰白
蓋B 口径12.7cm 器高 4.9cm	6-1 (2)	天井は比較的高く、口径も大きい。天井はわずかに丸みを持つが平らに近い。口縁部は、ほぼ垂直に下がり、端部近くで外側に曲げられ丸く仕上げられている。2/3 残存	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面には大半に回転ヘラ削り調整が施され、内面ほかは回転ナデ調整によって調整されている。	焼成甘く軟質 胎土密 外面 2.5Y8/1 灰白 内面 2.5Y8/1 灰白
蓋C 口径11.8cm 器高 3.8cm	6-4 (5~7・9,11~13)	口径が小さく、器高は比較的高い。天井はわずかに丸みを持つが平らに近い。口縁部は垂直気味に下がり、端部は丸く仕上げられている。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部1/2以上にヘラ削り、ほかは回転ナデ調整。	焼成甘く軟質 胎土やや粗 外面 2.5Y7/4 浅黄 内面 5Y8/1 灰白
蓋D 口径 7.1cm 器高 3.3cm	7-1 (2~14・16,22~24)	口径は小さく、天井部につまみを貼付し、両側の端内部にはかえりを伴う形状のものである。つまみは菱形である。かえりの部分が両端からさらに下がっている。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部中央には回転ヘラ削り調整、内面中央にはナデ調整、ほかは回転ナデ調整。	焼成良好 胎土粗 外面 5YR7/2 明褐灰 内面 2.5YR6/3 にぶい黄橙

器種・法量	図版番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋E 口径10.2cm 器高 2.4cm	7-15 (17~21)	天井は比較的低く、平らである。天井から口縁部へはわずかに丸みをもつが、ほぼ直線的に下がる。端部破丸く、当該部分が接地する。かえりは短く、丸く仕上げられている。天井部中央につまみの貼付した痕跡は全く見られない。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部三分の二以上へラ切り未調整。なお天井部から口縁部にかけて一部に回転へラ削りの痕跡を残す。口縁部、および内面はいずれも回転ナデ調整を行う。	焼成良好 胎土密 外面 5Y6/1 灰 内面 N6/0 灰
蓋F 口径14.5cm 器高 3.5cm	8-18 (5~22)	天井部中心に扁平な宝珠つまみを貼付する。天井は比較的高く丸みを持つ。口径は大きく、両端から内側に比較的最長い断面三角形のかえりを伴う。	マキアゲ・ミズビキ成形、天井部中央には回転へラ削り調整、他は回転ナデ調整。27と同じ	焼成甘い軟質 胎土やや粗 外面 5Y8/2 灰白 内面 5Y8/2 灰白
蓋G 口径14.4cm 器高 3.8cm	8-4 (1~4)	天井部中央に扁平な宝珠つまみを貼付する。天井は比較的高く丸みを持つ。口径が大きく、わずかにかえりが両端より上方に位置する。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面2/3以上に回転へラ削り調整。他は回転ナデ調整。	焼成良好 胎土密 外面 10YR4/2 灰黄褐 内面 2.5Y5/2 黄灰
蓋H 口径24.9cm 器高 3.1cm (残存)	13-17 (16)	大型の蓋である。天井部中心に扁平な宝珠つまみを貼付すると見られるが欠損。天井は比較的高く丸みを持つ。	マキアゲ・ミズビキ成形、回転ナデ調整。	焼成良好 胎土密 外面 N4/0 灰 内面 5B5/1 青灰

器種・分量	図版番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋 I 口径13.2cm 器高 1.8cm	13-1 (1~5)	天井部は低く平らで、中央に扁平なつまみを貼付する。天井部両端は下方に曲げられている。完形品。ひずみが著しい。	マキアゲ・ミズビキ成形。天井部外面は2/3に回転ヘラ削り調整が行われ、内面にはナデ調整、ほかはいずれも回転ナデ調整が行われている。	焼成良好 胎土緻密 外面 N6/0 灰 内面 5Y6/1 灰
杯 A 口径 8.9cm 器高 2.5cm	9-1 (9-1~12、 10-1~10)	たちあがりが高く、両端から下方に位置する。口径は小さく、比較的器高高的。欠損のため反転復元。底部にヘラ記号。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面は回転ヘラ切り、ほかは回転ナデ調整を行う。	焼成やや甘い 胎土やや粗 外面 10YR7/6 明黄褐 内面 2.5Y7/4 浅黄
杯 B 口径10.2cm 器高 2.3cm	9-13 (9-13~15、 10-10~19)	たちあがり短く内傾し橋部は丸い。受け部は比較的長く、外上方にのびる。たちあがりは受け部の両端から下方に位置する。底部にヘラ記号「-」全体の1/2残存。	底部外面は回転ヘラ切り、ほかは回転ナデ調整を行う。	焼成やや甘い 胎土やや粗 外面 7.5YR6/4 にぶい橙 内面 10YR7/4 にぶい黄橙
杯 C 口径10.9cm 器高 3.9cm	11-2 (1~9、14・15・17・ 19)	口径は小さく、底部は比較的深く丸みを持つ。口縁部は「S」字状に上外方にのび、端部は丸く仕上げられている。口縁部と底部の境に稜を認める。底部中央にヘラ記号「×」。完形品	マキアゲ・ミズビキ成形。底部外面には回転ヘラ削り調整が行われている。	焼成良好 胎土やや粗 外面 5Y7/1 灰白 内面 5Y8/1 灰白

器種・法量	図版番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯D 口径10.6cm 器高 3.1cm (残存)	11-10 (10・13・16・18)	底部は深くまるみを持つ。口縁部はわずかに「S」字状をなして外上方にのび、端部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形、回転ヘラ削り調整、ほかは回転ナデ調整。	焼成やや甘い 胎土やや粗 外面 2.5Y6/3 にぶい黄 内面 2.5Y6/3 にぶい黄
杯E 口径 9.0cm (復元) 器高 3.1cm	12-1 (1~17)	底部は比較的深く平らである。口縁部は底部から上外方にのび、さらに中位で外方に曲げ、端部に至る。口縁端部は丸く仕上げられている。全体の三分の二が残存するが、口縁部は残存状況が不良である。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部三分の二以上ヘラ起こし未調整。なお天井部から口縁部にかけて、及び口縁部、および内面はいずれも回転ナデ調整を行う。底部にヘラ記号を認める。	焼成良好 胎土密 外面 5Y5/1 灰 内面 N6/0 灰
杯F 口径12.3cm 器高 4.0cm	14-11 (13-15、 14-10~18)	比較的高い高台を底部に伴う杯である。杯の口径は比較的大きく、口縁部は内彎気味に内上方にのび、端部は丸く仕上げている。高台で囲まれた底部、および口縁部外面にヘラ記号。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ナデ調整、底部には回転ヘラ削り調整。	焼成良好 胎土密 外面 2.5Y6/1 黄灰 内面 10YR6/2 灰黄褐
杯G 口径14.7cm 器高 3.9cm	14-6 (6~14)	底部は比較的深く平らで、両端に高台を貼付する。口縁部は大きく外彎して外上方にのび、端部は丸く仕上げている。	マキアゲ・ミズビキ成形、回転ナデ調整。底部中央は回転ヘラ削り調整。	焼成良好 胎土やや粗 外面 7.5Y4/1 灰

器種・法量	図版番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
高杯 復元口径 14.3 cm 器高 2.1 cm (残存)	14-4 (3~8)	杯部はわずかにふくらみを持つ平板状をなし、両端を垂直に曲げている。口径には大小があるが、当該例は大きい。脚は欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形。底部にはカイテンヘラ削り調整、ほかは回転ナデ調整。	焼成良好 胎土密 外面 5PB5/1 青灰 内面 5PB6/1 青灰 時期的には、今回調査の窯とは合致しない可能性が濃い。
短頸壺A 口径 12.4 cm 器高 9.6 cm	14-1	口頸基部太く、頸部は外上方になだらかにのび、端部は丸く仕上げられている。体部は最大径を上位に求める球体をなし、底部は丸い。	マキアゲ・ミズビキ成形。回転ヘラ削り、回転ナデ調整。	焼成良好 胎土やや粗 外面 2.5Y6/4 にぶい黄 内面 2.5Y7/4 浅黄
短頸壺B 器高 7.2 cm (残存)	14-2	口頸基部太く、頸部は外上方になだらかにのび頸部は丸く仕上げられている。体部は最大径を中位に求める球体をなし、体部中半以下は欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形、回転ナデ調整。	焼成良好 胎土やや粗 外面 N6/0 灰 内面 2.5Y6/1 黄灰
長頸壺 口径 6.9 cm (復元) 器高 3.8 cm (残存)	16-12	小型の長頸壺の一部。 口頸基部細く、外反する頸部は端部付近で、さらに外方に曲げられ端部にいたる。 頸基部以下を欠損。	マキアゲ・ミズビキ成形、回転ナデ調整。	焼成良好 胎土密 外面 N3/0 暗灰 内面 5R2/1 赤黒

器種・分量	図版番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
平瓶 口径 7.6cm (復元) 器高 5.9cm (残存)	16-9 (10)	平瓶の口頸部の破片である。基部細く、外反して外上方にのび端部を丸く仕上げる。	マキアゲ・ミズビキ成形、回転ナデ調整。	焼成良好 胎土粗 外面 5Y8/3 淡黄 内面 10YR6/6 明黄褐
甕A 口径18.5cm (復元) 器高 4.8cm (残存)	16-1	口頸基部太く、なだらかに外反する頸部は端部で外傾する面をなす。なお頸部中位外面に沈線一条を巡らせる。	マキアゲ・ミズビキ成形、回転ナデ調整。焼成良好	胎土やや粗 外面 5Y6/1 灰 内面 5Y4/1 灰
甕B 口径22.0cm (復元) 器高 4.4cm (残存)	16-2	口頸基部太く、なだらかに外反する頸部は端部で大きく肥厚させ、段をなす。	マキアゲ・ミズビキ成形、回転ナデ調整。	焼成良好 胎土やや粗 外面 10YR6/3 にぶい黄橙 内面 10YR6/4 にぶい黄橙
甕C 口径21.5cm (復元) 器高 7.0cm (残存)	16-3	口頸基部太く、なだらかに外反する頸部は端部で肥厚させ、段をなす。体部は頸部と「く」の字に曲げられ、外面には平行叩き、内面には円弧叩きを施す。	マキアゲ・ミズビキ成形、回転ナデ調整。	焼成良好 胎土やや粗 外面 N6/0 灰 内面 2.5Y5/1 黄灰
甕D 口径24.0cm (復元) 器高 6.6cm (残存)	16-4 (5)	口頸基部太く、なだらかに外反する頸部は端部で大きく段をなす。体部は頸部と「く」の字に曲げられ、外面には平行叩き、内面には円弧叩きを施す。外面体部に自然釉。	マキアゲ・ミズビキ成形、回転ナデ調整。	焼成良好 胎土密 外面 7.5YR3/1 黒褐 内面 10YR3/1 黒褐

器種・法量	図版番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕E 口径21.4cm (復元) 器高 6.4cm (残存)	16-7 (6~8)	口頸基部太く、なだらかに外反する頸部は端部で大きく屈曲させ段をなして端部にいたる。体部は頸部と大きく「L」の字に曲げられて、外面には平行叩き、内面には円弧叩きを施す。	マキアゲ・ミズビキ成形、回転ナデ調整。	焼成甘い 胎土やや密 外面 10YR7/3 にぶ い黄橙 内面 10YR6/3 にぶ い黄橙

## 第4章 考察

### 1、牛頸窯跡群の須恵器の化学的特性

三 辻 利 一

須恵器産地推定法は一挙に出来上がったものではなく、長期間にわたる窯跡出土須恵器の分析化学的研究による膨大な分析データを基礎にして、統計学の考え方を導入して組み立てられたものである。窯跡出土須恵器の分析化学的研究によって、全国各地の窯跡出土須恵器はそれぞれ、K、Ca、Rb、Sr、の4元素によって特定され、独自の化学的特性をもつことが見つけられた。さらに、良質の粘土の産出地域には多数の窯跡が見つけられており、窯跡群を形成する。窯跡群を形成する各窯跡から出土する須恵器はどこでも、類似した化学的特性をもつことが実証されている。この結果、窯跡群としてまとまることがわかった。すでに、牛頸窯跡群でも200点をこえる試料が分析されており、その化学的特性は把握されている。したがって、今回分析した試料については、これまでに出されているデータに対応するか、どうかという観点からまとめられた。

分析値は表2にまとめられている。全分析値は同時に測定された岩石標準試料、JG-1の各元素の蛍光X線強度をつかって標準化された値で表示されている。

通常、分析値はK-Ca、Rb-Srの両分布図上にプロットされる。今回分析した試料の両分布図は図17に示されている。比較対照のため、これまでに得られている牛頸窯跡群の試料の分析データにもとづいて牛頸領域を描いてある。今回分析した試料は殆どこの牛頸領域に分布しており、母集団としての牛頸群に組み込めることができることがわかる。これまでのデータを見る限り、窯跡群内に全く異質の化学的特性をもつ須恵器をだす窯跡は全国どこにも見つけられていない。このことは在地産の粘土を素材として須恵器を焼成したことを物語る。今回の分析データもその一例である。また、このことは同じ化学的特性をもつ粘土は牛頸窯跡群一帯に広く分布していることを示唆している。ただし、自然界特有の微妙なばらつきがあり、窯跡の所在位置によって、両分布図では微妙に分布がずれる。必ずしも、すべて窯跡出土須恵器がぴたりと一致する訳ではない。ただし、同じ窯跡群内の窯間の相互識別は一般には難しい場合が多い。現時点では、これらの窯間の相互識別を検討してもあまり意味がなく、母集団として牛頸群をまとめ、他の母集団との相互識別を検討し、牛頸窯跡群の製品の伝播を追跡することに意味がある。現時点では牛頸窯跡群の製品の供給状況が十分把握出来ていない状況である。

表2 試料の分析値

	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
No. 1	0.466	0.410	3.30	0.460	0.806	0.521
2	0.403	0.262	2.80	0.487	0.656	0.266
3	0.409	0.217	3.18	0.514	0.524	0.281
4	0.449	0.231	2.26	0.628	0.671	0.379
5	0.345	0.293	3.60	0.413	0.635	0.334
6	0.427	0.361	3.11	0.514	0.760	0.466
7	0.414	0.207	2.72	0.517	0.578	0.268
8	0.462	0.204	2.68	0.560	0.614	0.316
9	0.462	0.193	2.57	0.642	0.551	0.327
10	0.476	0.377	2.72	0.561	0.830	0.482

	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
No. 11	0.428	0.374	3.10	0.506	0.793	0.495
12	0.404	0.379	2.75	0.505	0.901	0.428
13	0.417	0.166	2.36	0.561	0.532	0.242
14	0.353	0.275	3.00	0.592	0.692	0.403
15	0.431	0.282	2.86	0.564	0.700	0.419
16	0.498	0.273	3.18	0.558	0.634	0.348
17	0.556	0.282	2.95	0.628	0.730	0.397
18	0.453	0.217	2.89	0.590	0.531	0.267
19	0.363	0.121	3.24	0.392	0.451	0.195
20	0.401	0.261	3.24	0.492	0.661	0.276
21	0.427	0.275	3.44	0.459	0.671	0.273
22	0.455	0.291	3.32	0.473	0.697	0.275
23	0.501	0.340	3.13	0.499	0.740	0.421
24	0.397	0.269	3.65	0.382	0.657	0.253
25	0.404	0.276	3.66	0.375	0.664	0.273
26	0.495	0.423	2.59	0.537	0.943	0.521
27	0.456	0.220	2.98	0.579	0.575	0.311
28	0.468	0.384	2.99	0.436	0.862	0.418
29	0.434	0.323	1.79	0.471	0.924	0.390

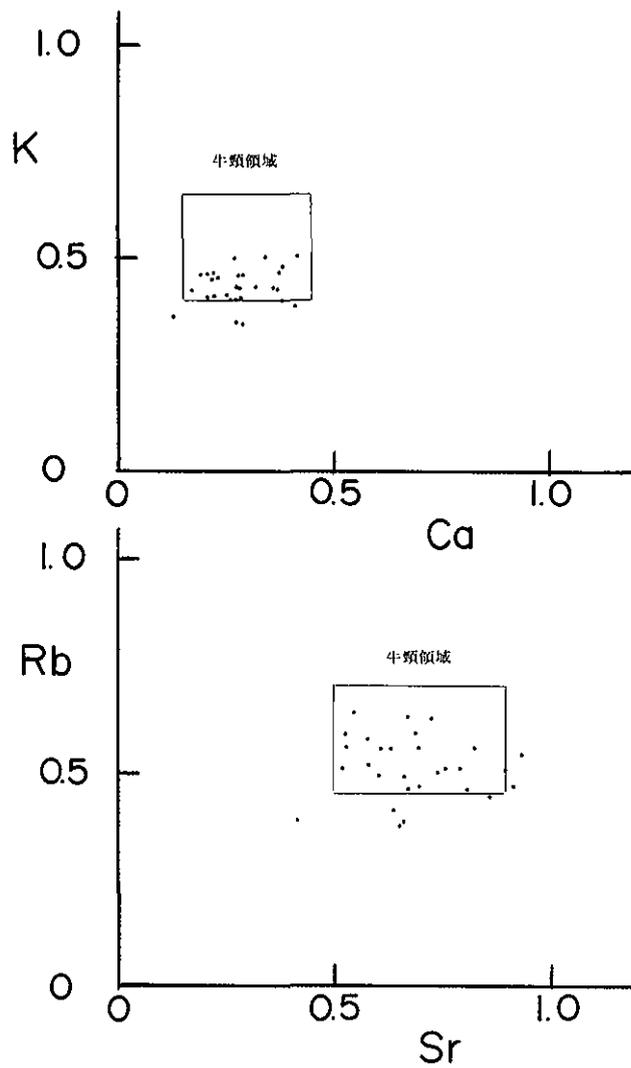


图17 K·Ca, Rb·Sr分布图

試料番号	器種	時期	出土地区	出土年月日	焼成度合
1	高台付身	8 C	上大利遺跡群試掘 2 5 次 5 地点	0 2 0 9 0 3	良好
2	杯	7 C	上大利遺跡群試掘 2 5 次 5 地点	0 2 0 9 0 3	やや軟質
3	甕	?	上大利遺跡群試掘 2 5 次 5 地点	0 2 0 9 0 3	良好
4	杯身	7c初	灰原C区黒色灰層	0 3 0 3 0 4	良好
5	甕	7c初	灰原C区黒色灰層	0 3 0 3 0 4	やや軟質
6	甕	7c初	灰原C区黒色灰層	0 3 0 3 0 4	良好
7	高台付身	8 C	灰原表採	0 3 0 3 0 4	良好
8	杯	7 C	初灰原表採	0 3 0 3 0 4	良好
9	甕	7 C	初灰原表採	0 3 0 3 0 4	良好
1 0	鉢	?	灰原表採	0 3 0 3 0 4	良好
1 1	甕	?	灰原表採	0 3 0 3 0 4	良好
1 2	甕	7c初	窯体内焚口灰層	0 3 0 3 1 1	良好
1 3	杯底部	7c初	窯体内焚口灰層	0 3 0 3 1 1	やや軟質
1 4	甕	7c初	窯体内焚口灰層	0 3 0 3 1 1	やや軟質
1 5	杯	7c初	窯体内床面上No.3	0 3 0 3 1 3	良好
1 6	甕	7c初	窯体内床面上No.3	0 3 0 3 1 3	良好
1 7	甕	7c初	灰原A2区黒色灰層	0 3 0 3 1 7	良好
1 8	甕	7c初	灰原A2区黒色灰層	0 3 0 3 1 7	良好
1 9	甕	7c初	灰原A2区黒色灰層	0 3 0 3 1 7	軟質
2 0	蓋	7c初	窯体D区縦断たちわり	0 3 0 3 1 7	良好
2 1	蓋	7c初	窯体D区縦断たちわり	0 3 0 3 1 7	軟質
2 2	蓋	7c初	窯体D区縦断たちわり	0 3 0 3 1 7	軟質
2 3	甕破片	7c初	窯体D区縦断たちわり	0 3 0 3 1 7	良好
2 4	蓋	7c初	下層窯D区右	0 3 0 3 1 8	軟質
2 5	甕	7c初	下層窯D区右	0 3 0 3 1 8	軟質
2 6	甕	7c初	下層窯D区右	0 3 0 3 1 8	軟質
2 7	甕	7c初	丘陵裾SP3	0 3 0 3 1 8	良好
2 8	杯	7c初	丘陵裾SP3	0 3 0 3 1 8	良好
2 9	杯	7c初	丘陵裾SP3	0 3 0 3 1 8	軟質

表 3 蛍光X線分析提供試料一覧

## 2、本堂3次窯跡出土須恵器について

—とくに蓋杯の形状の変化について—

中 村 浩

はじめに

今回の本堂3次調査で対象となった窯跡からは、多くの須恵器が出土した。これらの須恵器は、窯跡からの出土遺物と丘陵裾部に展開していたほかの遺跡に伴うものがある。しかし量的にも時期的にも圧倒的に窯跡出土遺物が多くを占めており、興味深いものも多い。とくに蓋杯については、型式編年で大きく形状が変化する時期に相当しており、その変化の状況を十分に観察しえる資料でもある。以下、今回の窯跡出土須恵器のうち、大半を占めていた蓋杯について形状変化を追いながら簡単に考察してみたいと思う。

型式編年上の画期

和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年では、蓋杯がいわゆる蓋と杯身が分かれており、かつ杯身側に受部が見られる段階のもの、これらを今仮に合子形形状と呼ぶとすると、この形状のほかに蓋杯では、蓋の天井部中央につまみを貼付するもの、さらに杯身では受部を伴わない口縁部の形態をなし、底部には高台を貼付するものと貼付しないものの二者が存在する。すなわち合子形とそうでない二者を合わせると都合三者の蓋杯の形状が存在することになる。またさらに時期が新しくなると天井のつまみがみられなくなるものも出現するが、今回の考察の対象ではないので省略する。

合子形形状のものは、初期須恵器と言われる段階から登場する。その形状は朝鮮半島の陶質土器の形状に近似するとも言われているが、本格的な合子形形状になり、細かな形状変化から時期的な推移を見ることができるようになるのは、この初期段階からやや新しくなった時期からである。陶邑編年ではⅠ型式2段階と呼ばれる段階から、受部及びたちあがりと呼ばれる部分が大きく立ち上がり特徴的である。このたちあがり時期の下降とともに短くなり内側に傾斜していくのである。この段階的な変化については、文末に記した、参考文献を参照されたい。

やがて、たちあがり短く形骸化する段階を陶邑編年ではⅢ型式6段階と分類している。以下に、参考文献からこれらの型式段階の特徴についての記述を引用すると次のようになる。

### Ⅲ型式6段階

前段階に比較して著しく器形が矮小化する段階である。とくに蓋杯の口径は各型式を通じてもっとも小さく、他の器種についても同様なことがいえる。一方、従来見られなかった新しい器形も、この段階からⅢ型式1段階にかけてみられる。……（中略）

### 蓋杯

蓋、杯身ともに口径が10センチメートル未満となる。蓋は前段階と同じく天井に丸みをもつ形であるが、手法的には天井部回転ヘラ切り未調整のものが多くなり、きわめて雑な感を与える。杯身の場合も大まかな形状は前段階のものをさらに小型化したものであるが、たちあがり、受け部端の上面より上方に見られたものが、時期の下降に伴って徐々に下方に移っていく。とりわけ、この段階ではたちあがりの消滅傾向が如実に現れている。とくにこの段階の終わりに相当する杯身のたちあがり、口縁端部をわずかに内傾させたごとくの、きわ

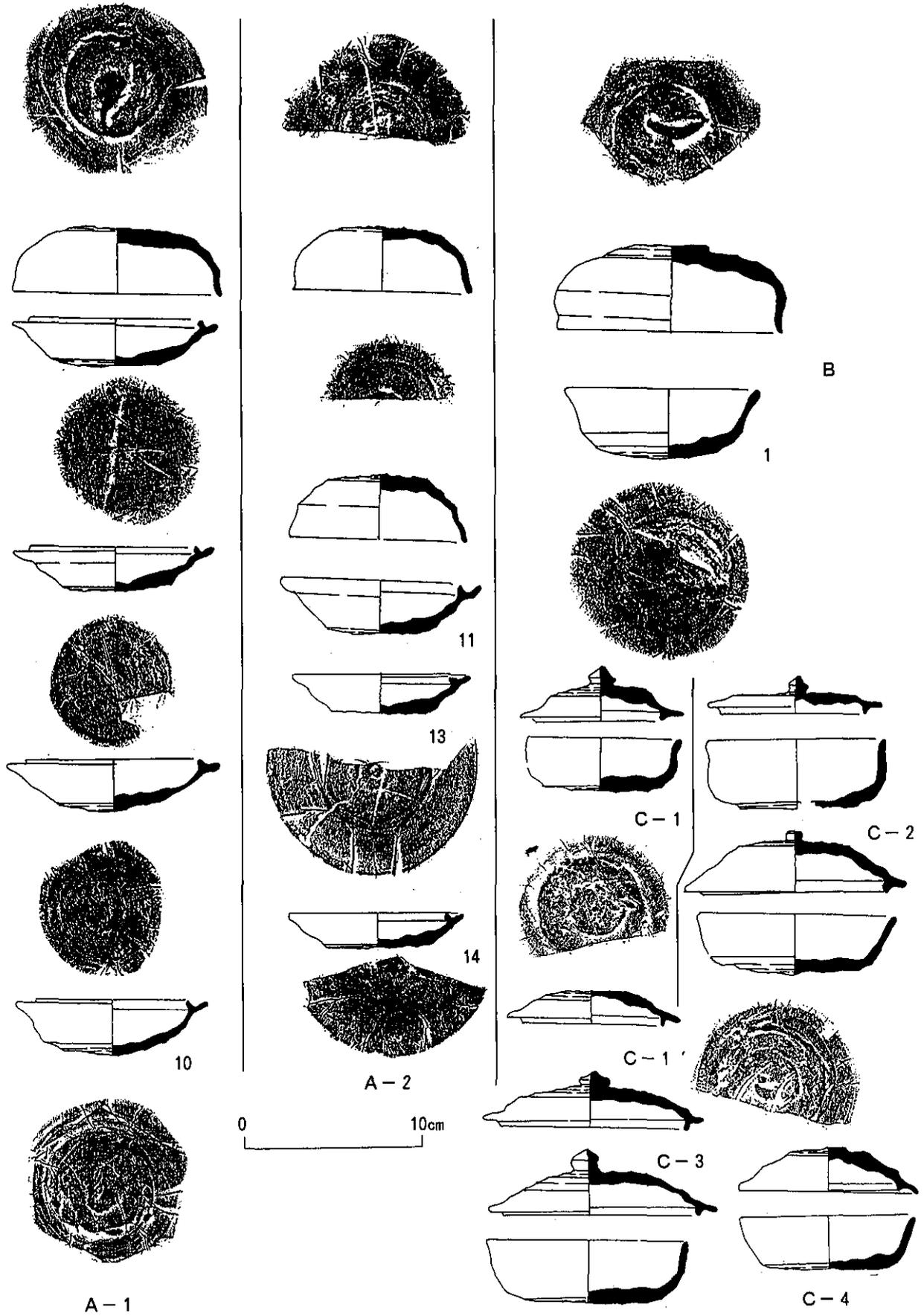


図18 蓋杯の形状変遷(1)

めて形骸化したものになっている。……（中略）

### Ⅲ型式1段階

蓋杯の形態が全く逆転する段階である。それとともに前型式段階と同様、新器種の出現があり、大きく須恵器生産が転換する時期でもある。とくに陶邑での資料からは、前段階以降に全く続かない一回起的な生産器形が存在すること、さらには窯の規模がきわめて短期間ではあるが小さくなり、同時に多数回の焼成を間断なく繰り返していることなどがあげられる。これらは従来見られなかったものであり、新しい様式の到来、あるいは大量の新しい技術者の参加がそこに想定されるのである。

#### 蓋杯

器形の変化は、ほぼ前段階と同じ傾向を示す。しかし一方で蓋の内面に比較的に長いかえりが出現し、天井部外面中央には断面ひし形を呈する宝珠様つまみが付されている。とくに内面に見られるかえりは、蓋の口縁端部よりも下方にのびており、まさに前段階の杯身を天地逆転させたかのようなものである。蓋の成形には、マキアゲ・ミズビキによっており、かえりはオリコミ手法によって形作られたものと思料される。またつまみは、天井部成形後、貼付されたもので、その後回転ナデなどの調整を施しているが、全く別個に造られて付されたというのではないと考えられる。天井部の1/2前後に、回転ヘラ切りの痕跡、あるいは回転ヘラ削り調整が施されている。

杯身は前段階の蓋を逆転させたかの印象を有するものと明らかに身として意識的に造られた形態、すなわち底部が平らで、口縁部が直立気味に立ち上がる形態の二者がある。（一部文章変更）しかし高台の付された杯身は、この段階では全く出現していない。杯身および蓋ともに製作はマキアゲ・ミズビキ成形で、底部外面には回転ヘラ切り未調整の痕跡が明瞭にみられる。なお器形については蓋に分類されるもので、つまみに極めて特殊なものも出土している。……（以下略）

#### 本堂3次窯跡出土資料について

ところで当該窯跡から出土した蓋杯について可能性も含めてセット関係を提示すると図17のようになる。すなわちもっとも先行すると見られる合子形のうち、受部とたちあがりを伴う杯身についてみれば、まずたちあがりの上端が受部の上端より上方に出ているもの（A-1と仮称する）、さらにたちあがりの上端が受部の上端より低いもの（A-2と仮称）の二者となる。A-1としたものには、受部の形状やたちあがりの内傾斜度合いの差が若干見られるが、時期的に大きな開きを伴うものとは考えられない。A-2とした形状では、たちあがりの高低が大きな差異となる。なお底部に仕上げの調整痕跡が認められることから、いずれも図示したような位置で天地の関係を持っていたものと考えられる。これらに伴うと見られる蓋は、いずれも稜を伴わない形状のもので、天井部は比較的高く丸い形状のものである。

A-1およびA-2の前後関係は、A-1がわずかに先行すると考えられるが、両者の出土位置からの細分は困難に近い。あえて求めるとこのようになる。またこれらの形状の須恵器の工人に差異が認められるかどうかについては、手法についての大きな目立った差は見られず、また底部外面

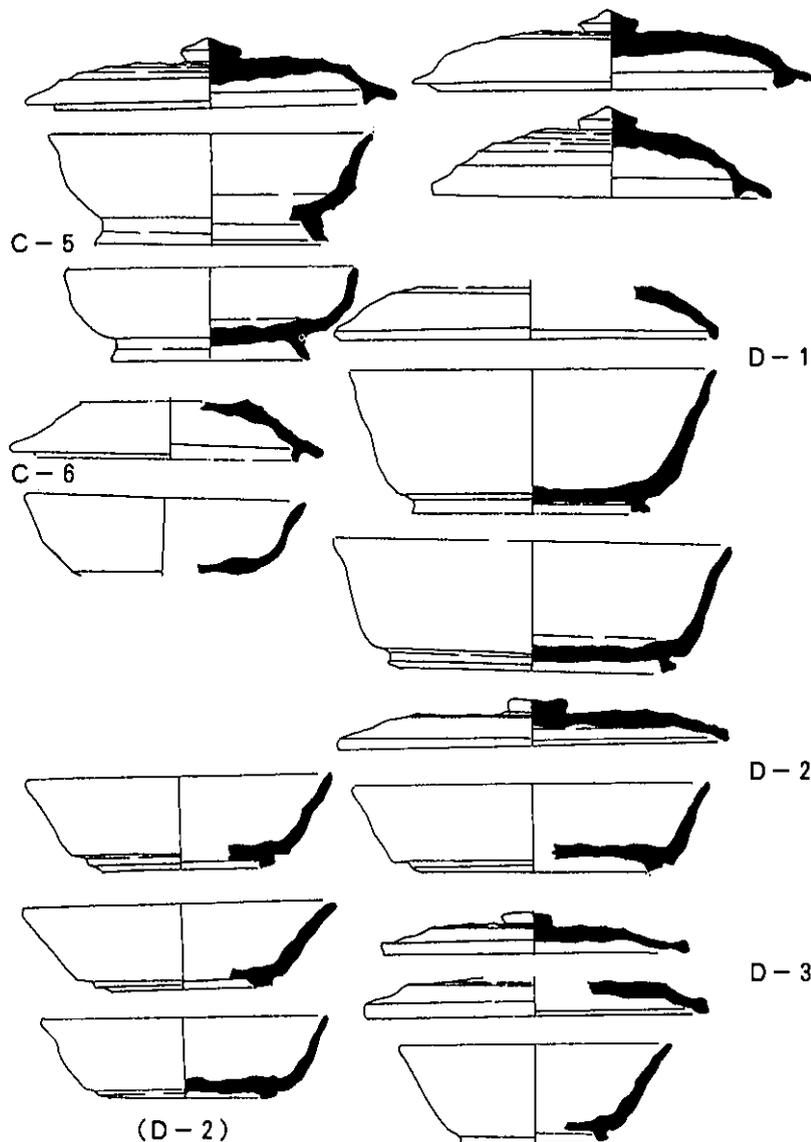


図19 蓋杯の形状変遷 (2)

次に天井部につまみを伴う形状についてである。図18ではCとしたものである。これらの形状にはつまみの形態の差異が若干認められることがあるが、形態的には先に紹介した陶邑編年のⅢ型式1段階に相当するものである。天井部の両端から内側にかえりが貼付されており、その先端は天井の両端より下方に見られるもの(C-1、1'、2、3)とかえりが天井両端から内側に見られるものがある(C-4)先のA形態とは時期的に新しい可能性が濃く、出土位置からもそれを証明することができる。しかしC-1、1'のようにつまみの有無による前後関係については、資料が不足しており判断ができないでいる。またC-1'とC-4についてはかえりの長短からの分類であるが、果たしてこれらの資料がこのように従来の杯身が逆転状態で存在するとしたのが正しいのかどうかについても問題は多く残されている。すなわちC-1'、4については灰原部分での採集であり、床面の上下によつての採集ではない。しかし両者ともに灰原A2区での出土であり、比較的窯跡本体にも近く、つまみを伴う形態のC-1などともほぼ同じ場所からの出土である。これら

に見られたヘラ記号はA-1、2について形状に大きな差が認められなかった。したがってこれらの製作工人には差がないとすると、A-1、2の形状の異なりは、両者の間に見られたわずかな時期さと見ることができよう。

次にAの形状に伴う蓋のうちやや口径に差が見られるものがある。これについては図18でB形態というものを想定してみた。この形状はいわゆる蓋と蓋がセットをなしているようにも見えるものであるが、陶邑でも類似例が見られることから、必ずしも荒唐無稽な組み合わせではないと考えられる。なおこの場合には、蓋の形態の所属する段階に相当するのが妥当と考えられる。

を勘案すると、これらつまみの見られないものについても、今回の調査整理の結果としては蓋として器種認定がされると考えておきたい。

またC-5、6としたものについては、前者の杯身底部には高台が貼付されており、後者にはそれらが見られない。C-5の形態については、杯身口縁の状況が単なる杯身の例とは異なり大きく半ばで曲線を変えているいわゆる稜碗の一種と見てよいだろう。またこれらに伴うと見られる蓋のかえりはいずれも貼り付けによって製作されたものであり、他のかえりに比較して厚く太いということがわかる。

Dとした蓋杯は、当該窯での製品ではない。当該窯での生産品は明らかにC類としたものまであり、時期的にはいずれも7世紀の範疇に含まれている。近接地域の窯で生産されたものが当該地域に運ばれて廃棄されたものと見られる。なおこれらのD類の蓋杯のうちもっとも先行するのは、D-I形態であり、ついでD-2、D-3と続く。陶邑編年との対比を行えば、C-1がIV型式1段階、D-2がIV型式2段階、D-3がIV型式Ⅲ-4段階相当と考えられる。時期的には8世紀と見てよいだろう。

むすびにかえて

以上、今回本堂3次窯跡から出土した須恵器のうち蓋杯について記述してきた。これらの資料は当該地域の7世紀の中葉段階の型式段階変化を見るためには重要な資料であり、今後とも注目される遺物群である。幸い床面下層と上層という比較も一部可能であったこともあり、同地域の比較資料としても今後有効に活用されることを期待したい。

ところで今回の報告でまず最初に注目したのは、蓋杯の逆転状況が果たして存在したのかどうかということである。事実としてつまみの出現によっての逆転現象は明らかであるが、いわゆる合子形のたちあがりを伴う器形での逆転現象が存在するのかどうかという問題である。すでに報告されている当該地域の窯の報告書では、大半がその存在が示されていない。

しかし牛頸中通りD-1号窯（『牛頸中通り遺跡群Ⅲ』1982）では、つまみを伴わない蓋の存在が図示されている。また牛頸中通り遺跡群50-1、60-1号窯、大宰府市宮ノ本遺跡（窯跡）でも同様な図がみられる。

またつまみを伴わない蓋の消費地の例では、福岡市早良区所在山崎古墳群（B区土拡墓）、福岡市城南区所在田島A遺跡（その他の遺構）、福岡市博多区所在那珂遺跡（第16号竪穴住居跡）、福岡市西区所在羽根戸南古墳群（E-3号墳、E-1号墳、E-9号墳、E-10号墳ほか）、福岡市博多区所在井相田C遺跡第5次（SD19）出土例などがある。これらの逆転状況をいかに評価できるのかについては今後類例の収集を行い判断していきたいと考えているが、このような蓋杯のあり方および存在状況はとくに九州地域に多いのも特徴のひとつであろう。

参考文献

中村浩『和泉陶邑窯の研究』

大野城市教育委員会『牛頸中通り遺跡群Ⅲ』1982

大野城市教育委員会『牛頸小田浦窯跡群』1992

福岡市教育委員会『山崎古墳群—第2次調査—』1994

福岡市教育委員会『田島A遺跡—Ⅲ・Ⅳ・5・6次報告—』2002

福岡市教育委員会『那珂23』1999

福岡県教育委員会『羽根戸南古墳群第3次調査』2001

福岡市教育委員会『井相田C遺跡第5次、高畑遺跡第14次』1996

大宰府市教育委員会『宮ノ本遺跡Ⅱ』1987

## あとがきにかえて

本年3月に実施した本堂3次の調査報告を可能な限り早く公刊するという少々乱暴な計画を立てて作業を進めた。幸い文化財学科の2・3回生学生諸姉の熱心な遺物整理作業への参加があり、また今夏に予定した発掘調査へのトレーニングも兼ねて新入生も4月下旬から作業に加わり、一層、遺物整理の進展に拍車がかかった。水洗いや注記作業は人海戦術で無事に完了したが、実測段階になってからは、少々スピードダウンせざるを得なかった。しかし参加学生の実力は徐々にではあるが確実に向上しており、次回のチャンスには、大きな推進力として活躍してくれるものと確信する。

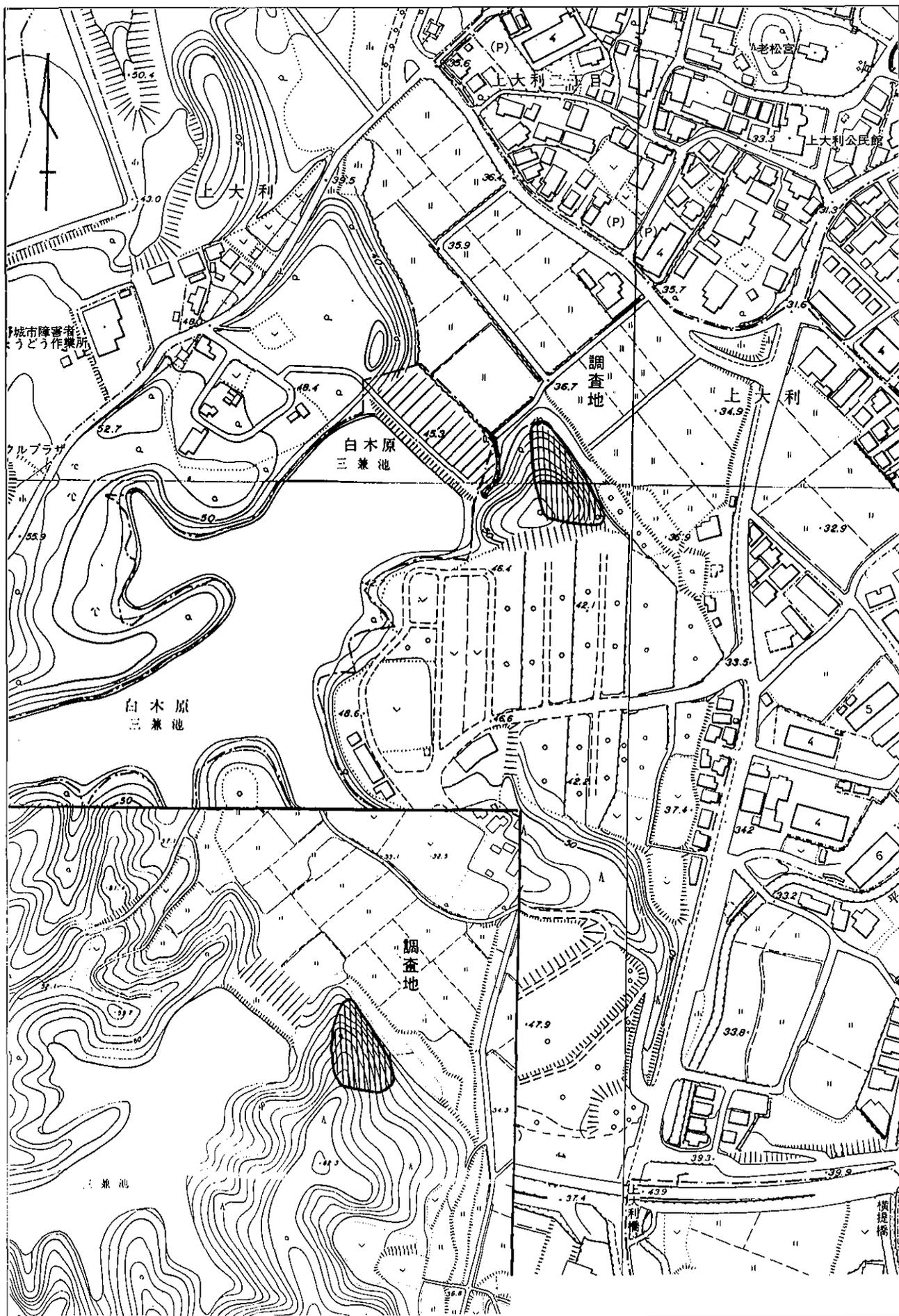
発掘調査の期間には十名の参加があり、遺物整理にはそれをはるかに上回る学生諸姉の参加を得た。発掘調査は現地での作業に加えて報告書作成までの遺物整理から構成されていることは改めて説くまでもないが、この間多くの人々の力によっていることも忘れてはならない。ここに報告書の完成を学生とこれら関係者の方々と共に慶びたいと思う。

最後になったが、このような貴重な機会を我々に与えていただいた福岡県大野城市教育委員会および関係機関の方々に心からお礼を申し述べる。本書が少しでも役立つように祈念するものである。

平成15年(2003)10月吉日

大谷女子大学文学部文化財学科 中村 浩

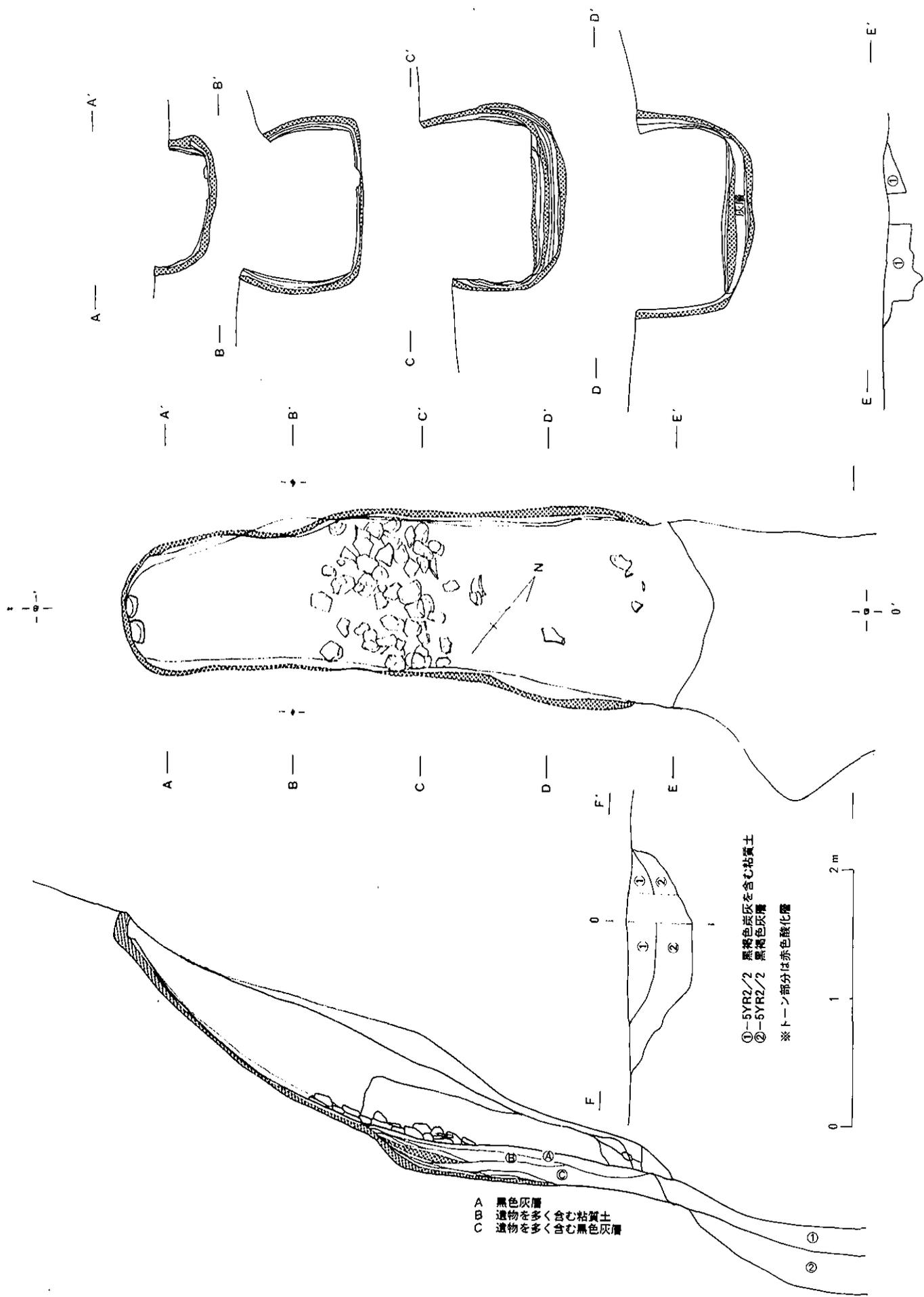
# 圖 版

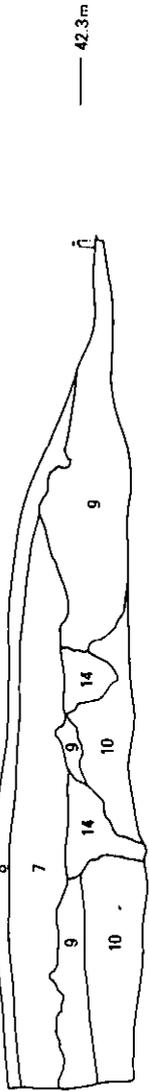
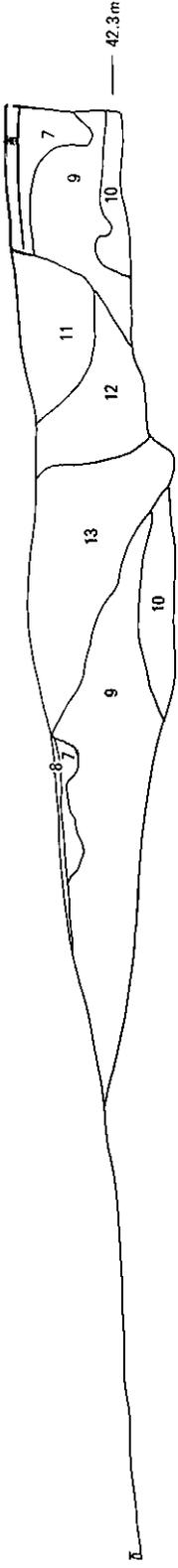


昭和23年米軍測量の写真より地形図におこしたものをS=1/5000

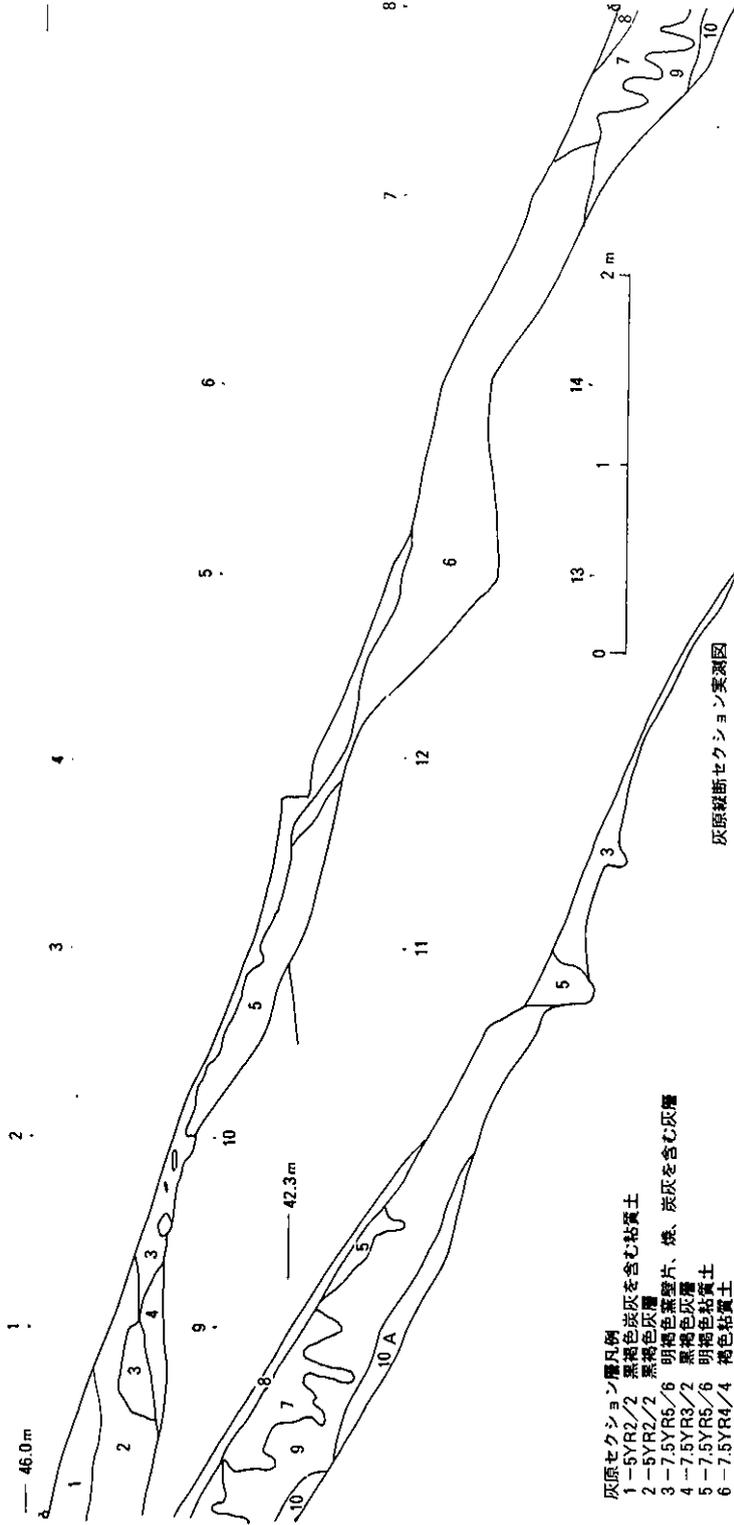
平成11年の地形図 (S=1/2500)





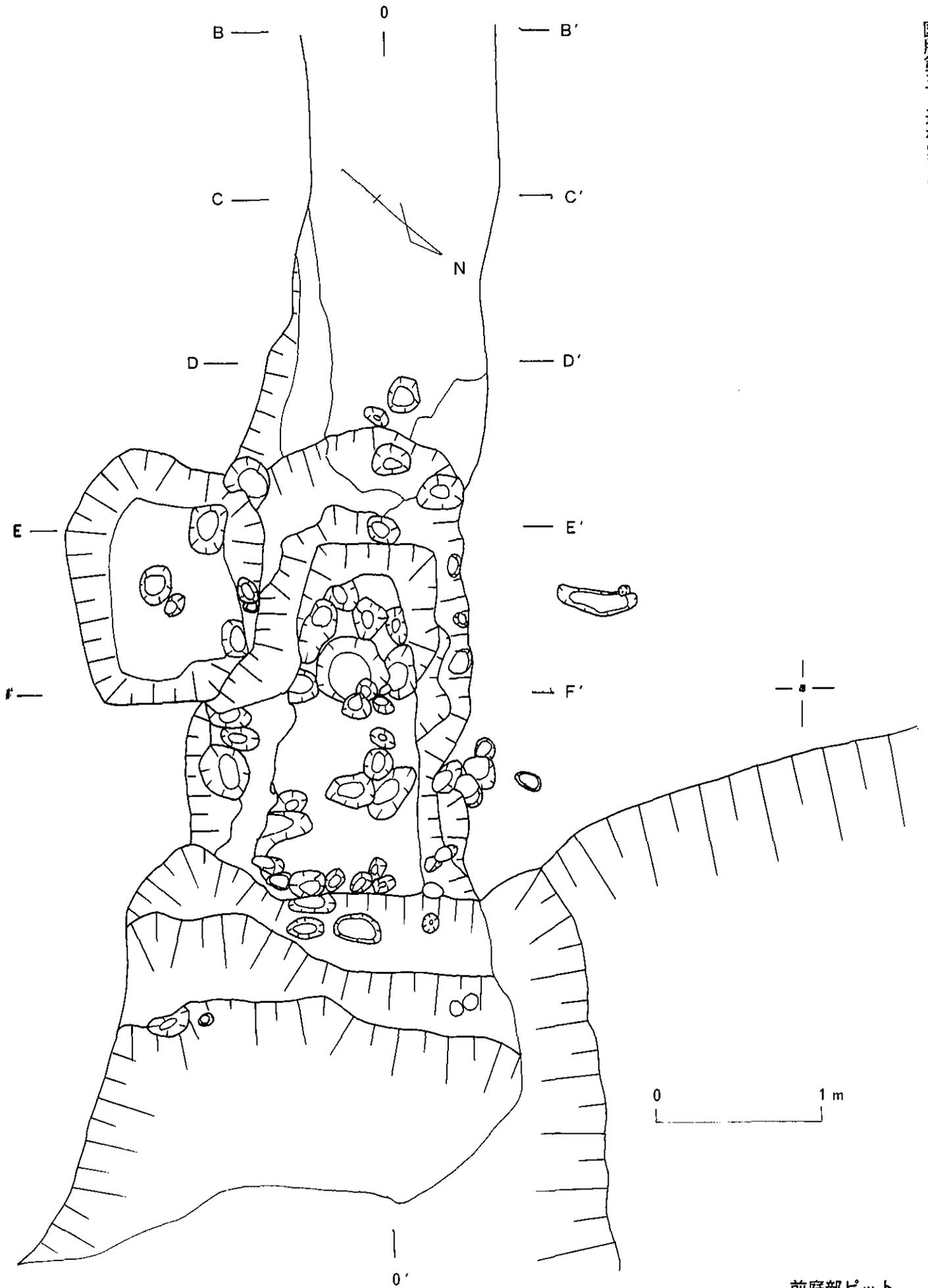


灰原遺跡セクション実測図

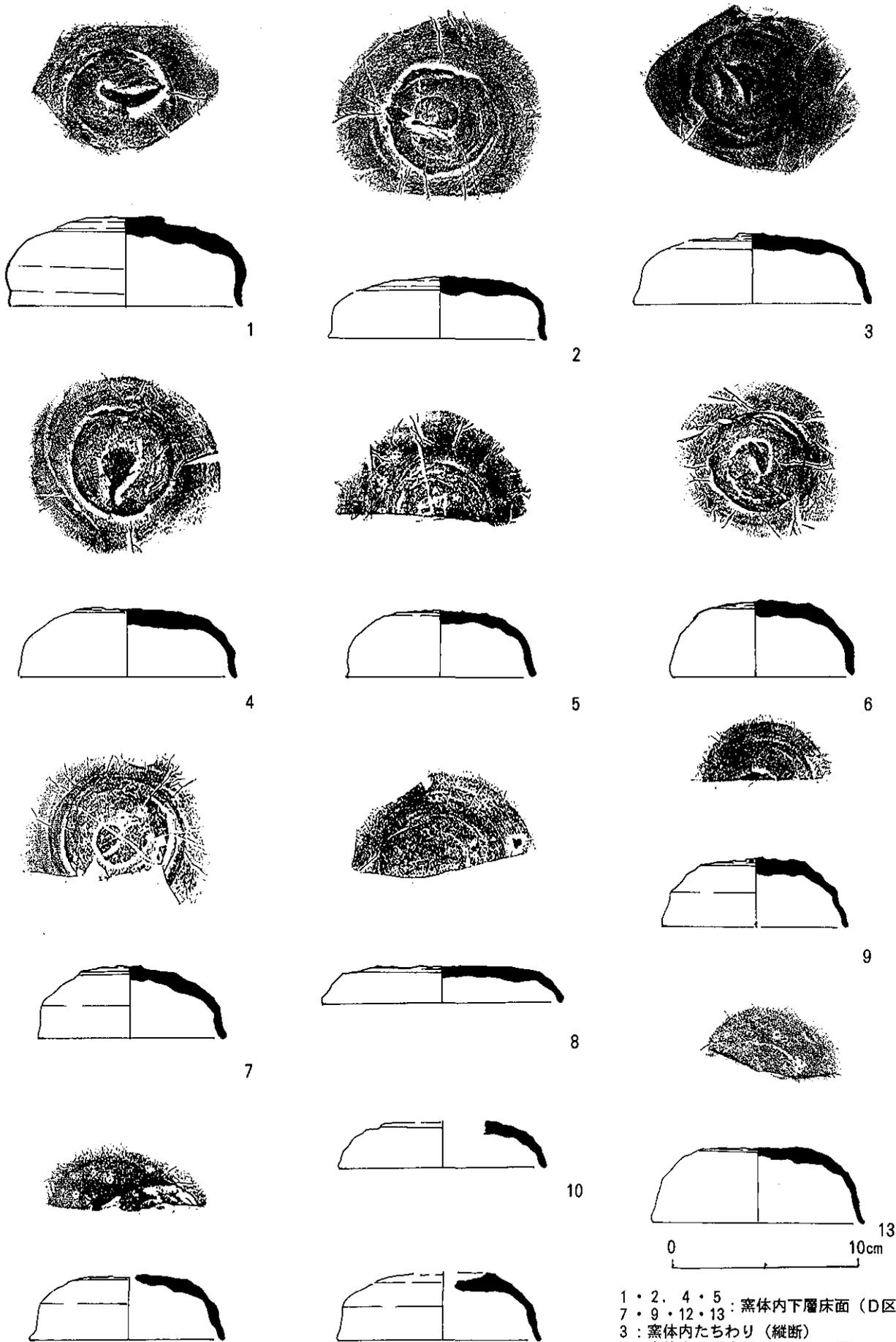


灰原遺跡セクション実測図

- 灰原セクション層凡例
- 1-5YR2/2 黒褐色炭灰を含む粘質土
  - 2-5YR2/2 黒褐色炭層
  - 3-7.5YR5/6 明褐色炭層片、燧、炭灰を含む灰層
  - 4-7.5YR3/2 黒褐色灰層
  - 5-7.5YR5/6 明褐色粘質土
  - 6-7.5YR4/4 褐色粘質土
  - 7-7.5YR6/1 黒褐色炭層
  - 8-7.5YR6/1 黒褐色炭灰を含む粘質土
  - 9-7.5YR5/6 明褐色炭灰を含む粘質土
  - 10-7.5YR6/8 褐色炭灰を少量含む粘質土
  - 11-7.5YR5/2 灰褐色、木の根を含む腐植土、ブロック状に粘質土を含む
  - 12-5YR5/2 灰褐色腐植土を含む粘質土
  - 13-5YR5/6 明赤褐色腐植土、ブロック状に灰褐色粘質土を含む
  - 14-7.5YR2/1 黒色、多量の炭灰を含む粘質土



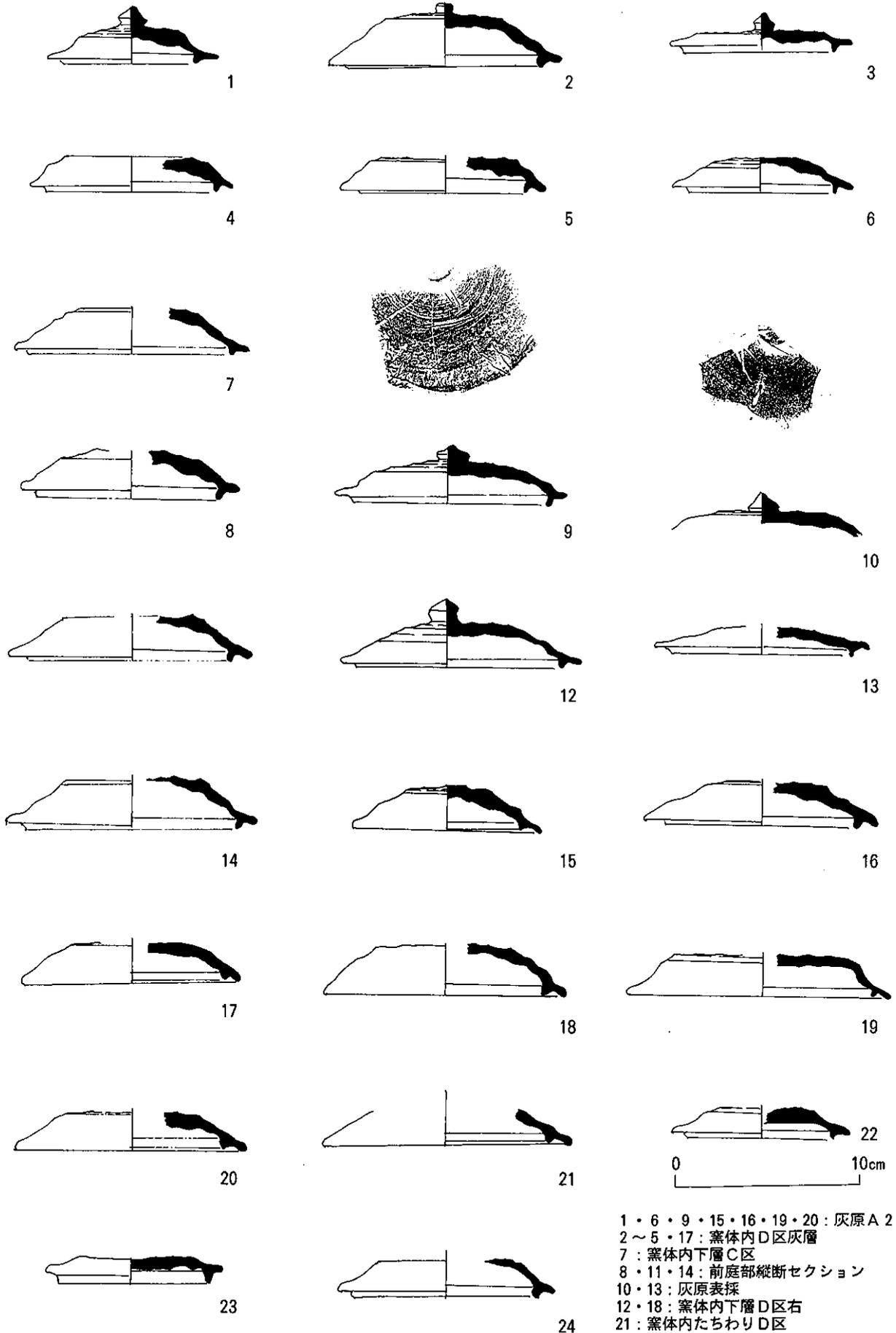
前庭部ピット



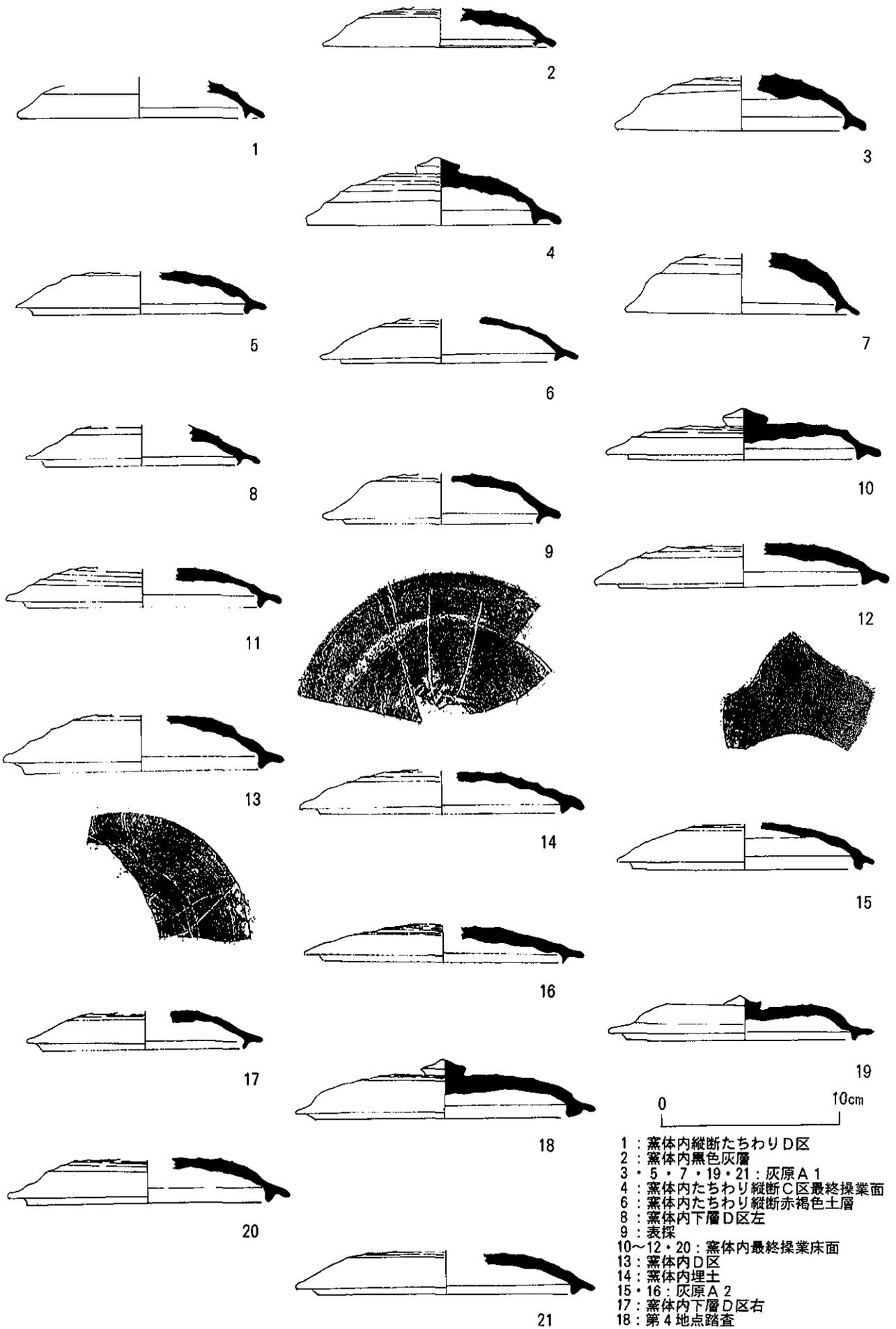
1・2・4・5：窯体内下層床面（D区左下層）  
 7・9・12・13：窯体内下層床面（D区右下層）  
 3：窯体内たちわり（縦断）  
 6：窯体内下層床面（D区右下層）  
 8：灰原C区  
 10：灰原A2区  
 11：灰原A1区

11

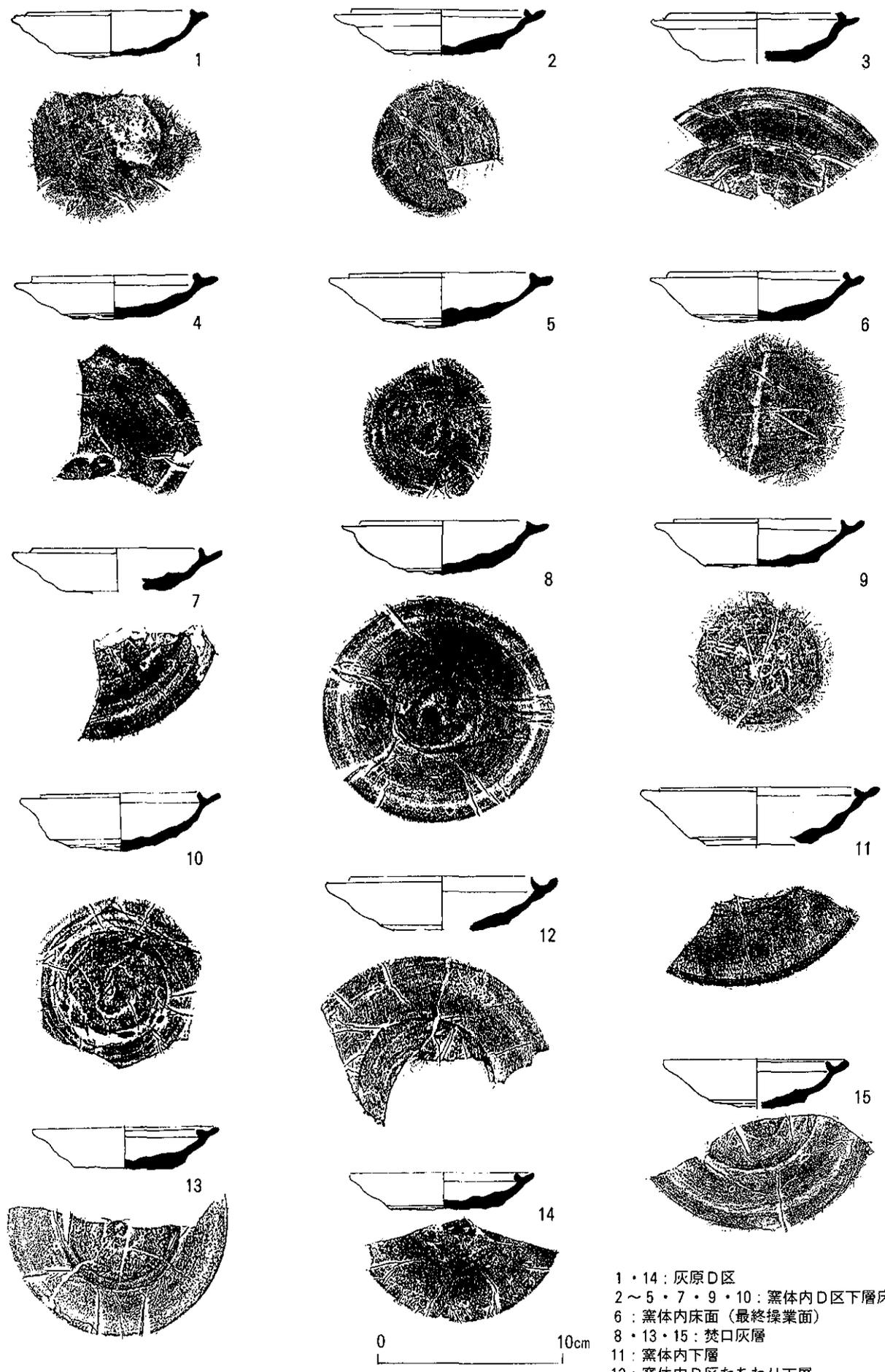
12



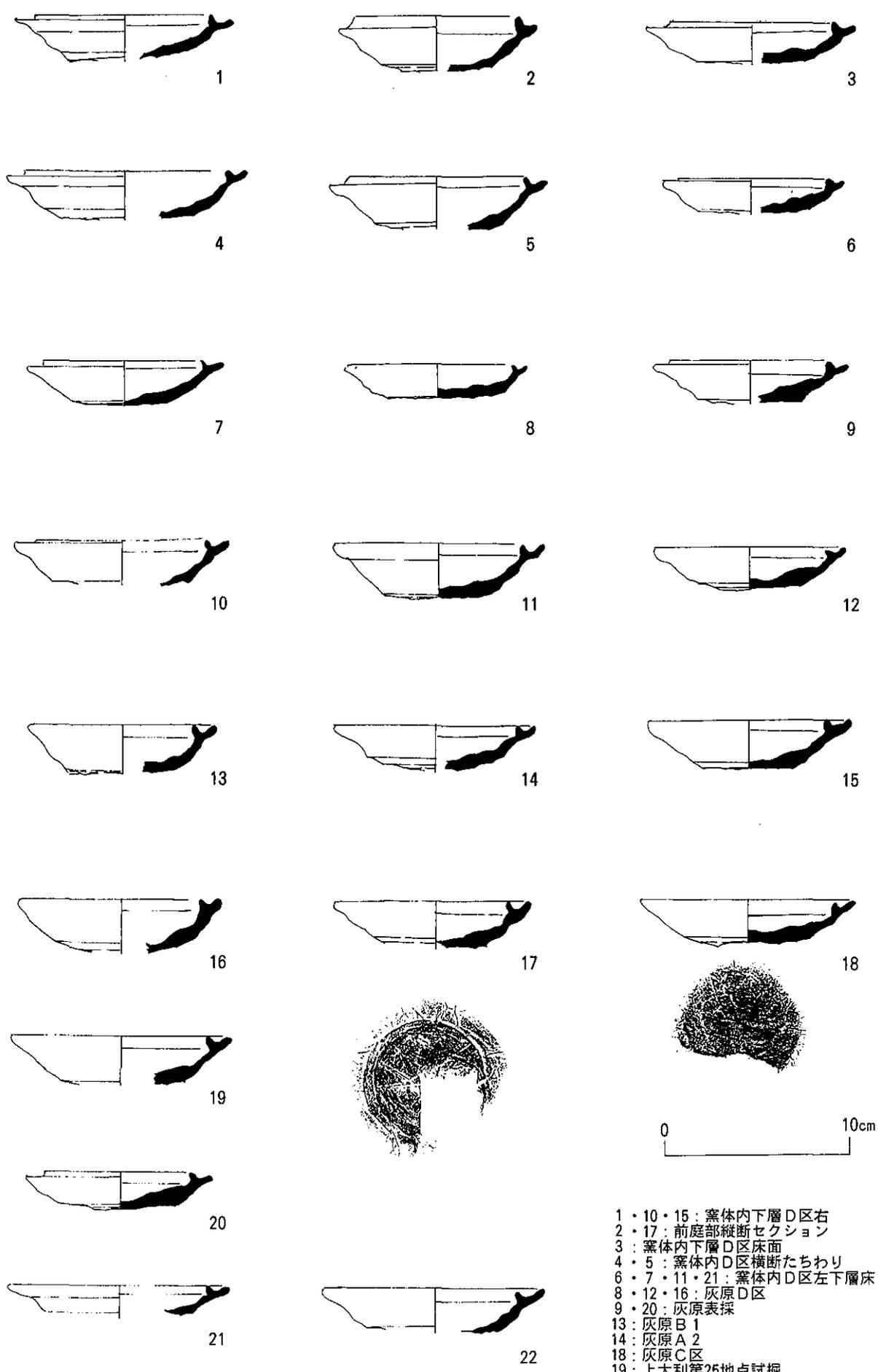
1・6・9・15・16・19・20：灰原A 2区  
 2～5・17：窯体内D区灰層  
 7：窯体内下層C区  
 8・11・14：前庭部縦断セクション  
 10・13：灰原表採  
 12・18：窯体内下層D区右  
 21：窯体内たちわりD区  
 22：灰原B 2区  
 23：灰原縦断セクション  
 24：窯体内D区縦断たちわり



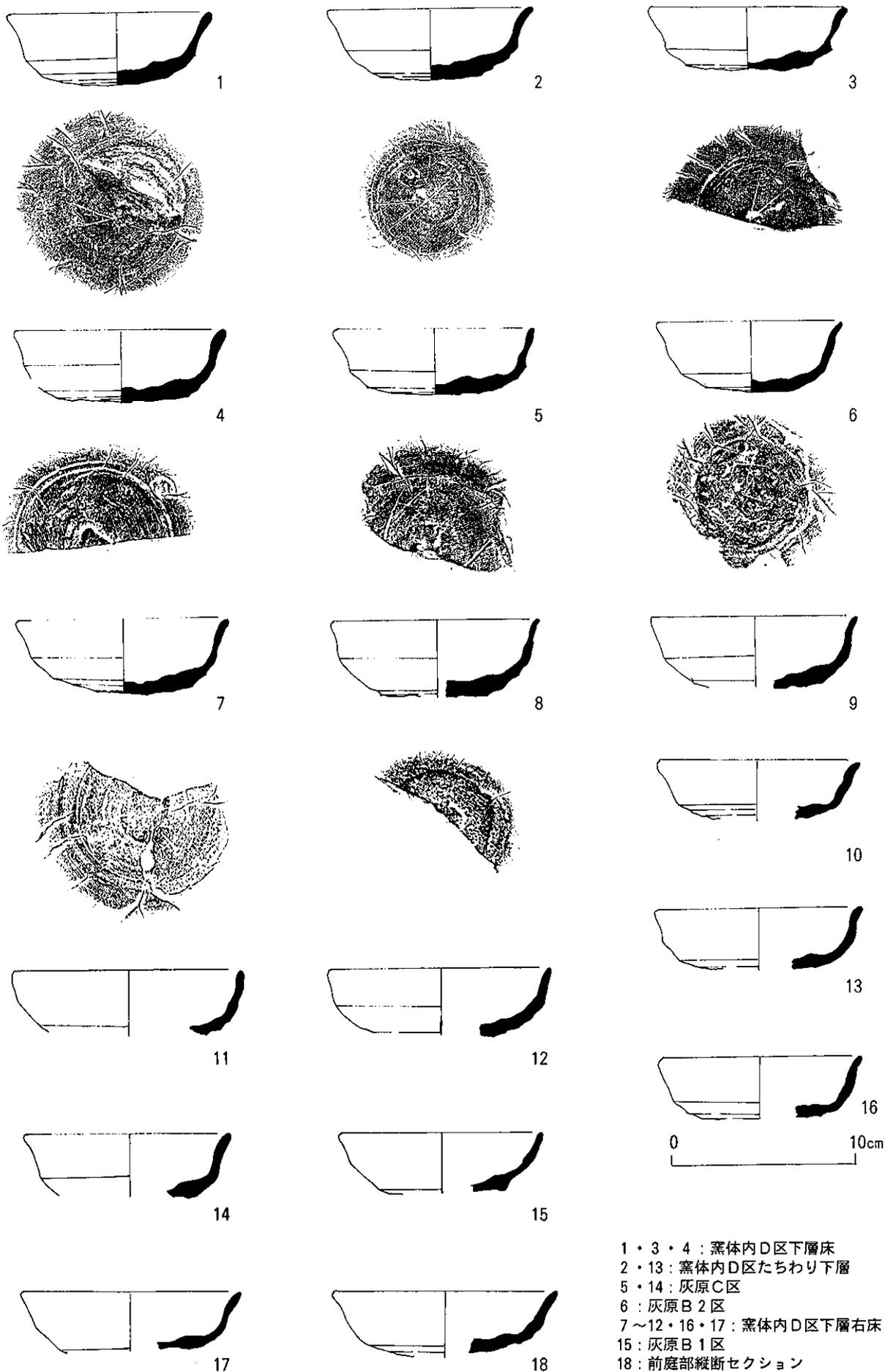
1 : 窯体内縦断たちわりD区  
 2 : 窯体内黒色灰層  
 3・5・7・19・21 : 灰原A 1  
 4 : 窯体内たちわり縦断C区最終操業面  
 6 : 窯体内たちわり縦断赤褐色土層  
 8 : 窯体内下層D区左  
 9 : 表探  
 10~12・20 : 窯体内最終操業床面  
 13 : 窯体内D区  
 14 : 窯体内埋土  
 15・16 : 灰原A 2  
 17 : 窯体内下層D区右  
 18 : 第4地点踏査



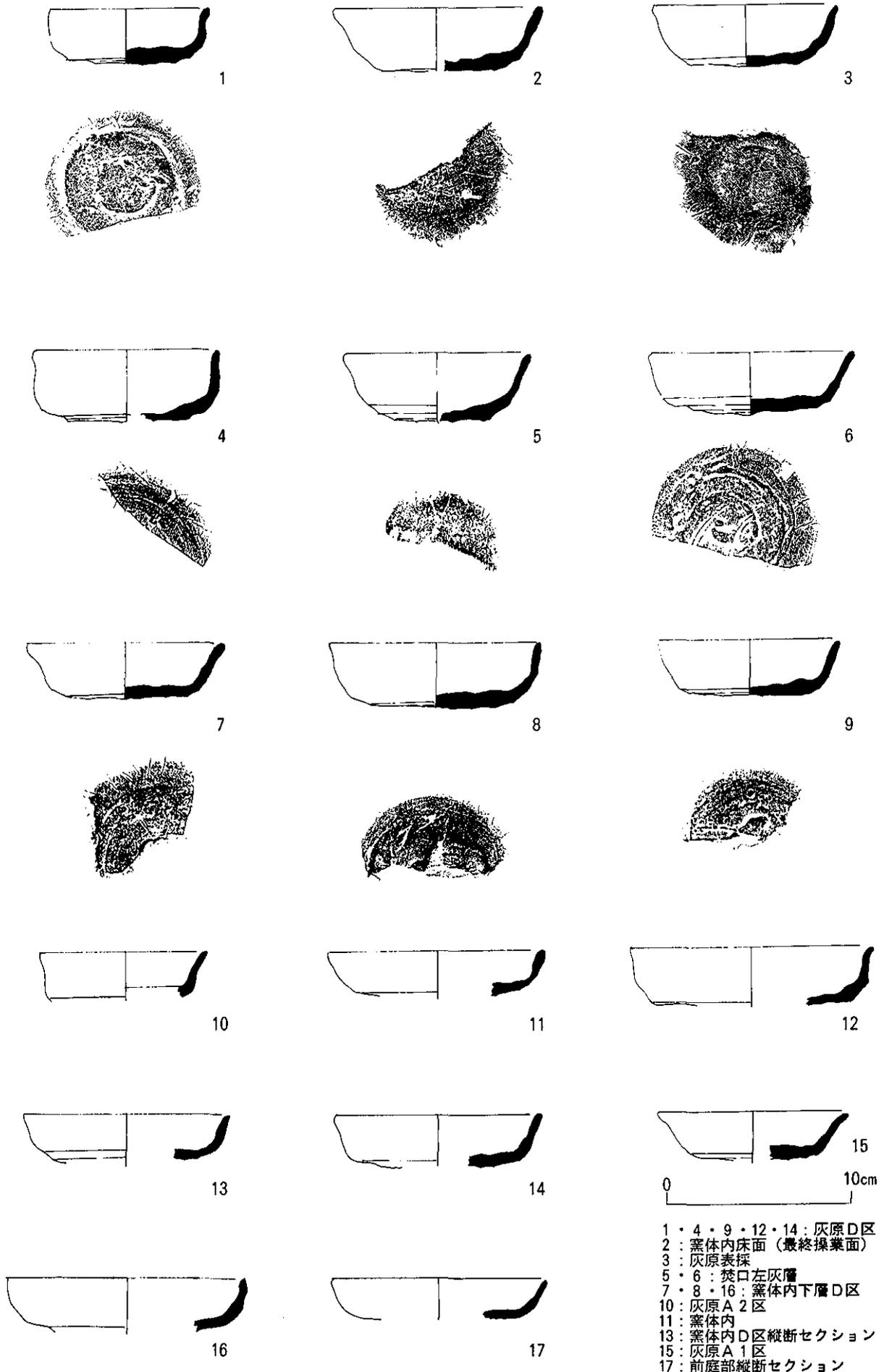
1・14：灰原D区  
 2～5・7・9・10：窯体内D区下層床  
 6：窯体内床面（最終操業面）  
 8・13・15：焚口灰層  
 11：窯体内下層  
 12：窯体内D区たちわり下層



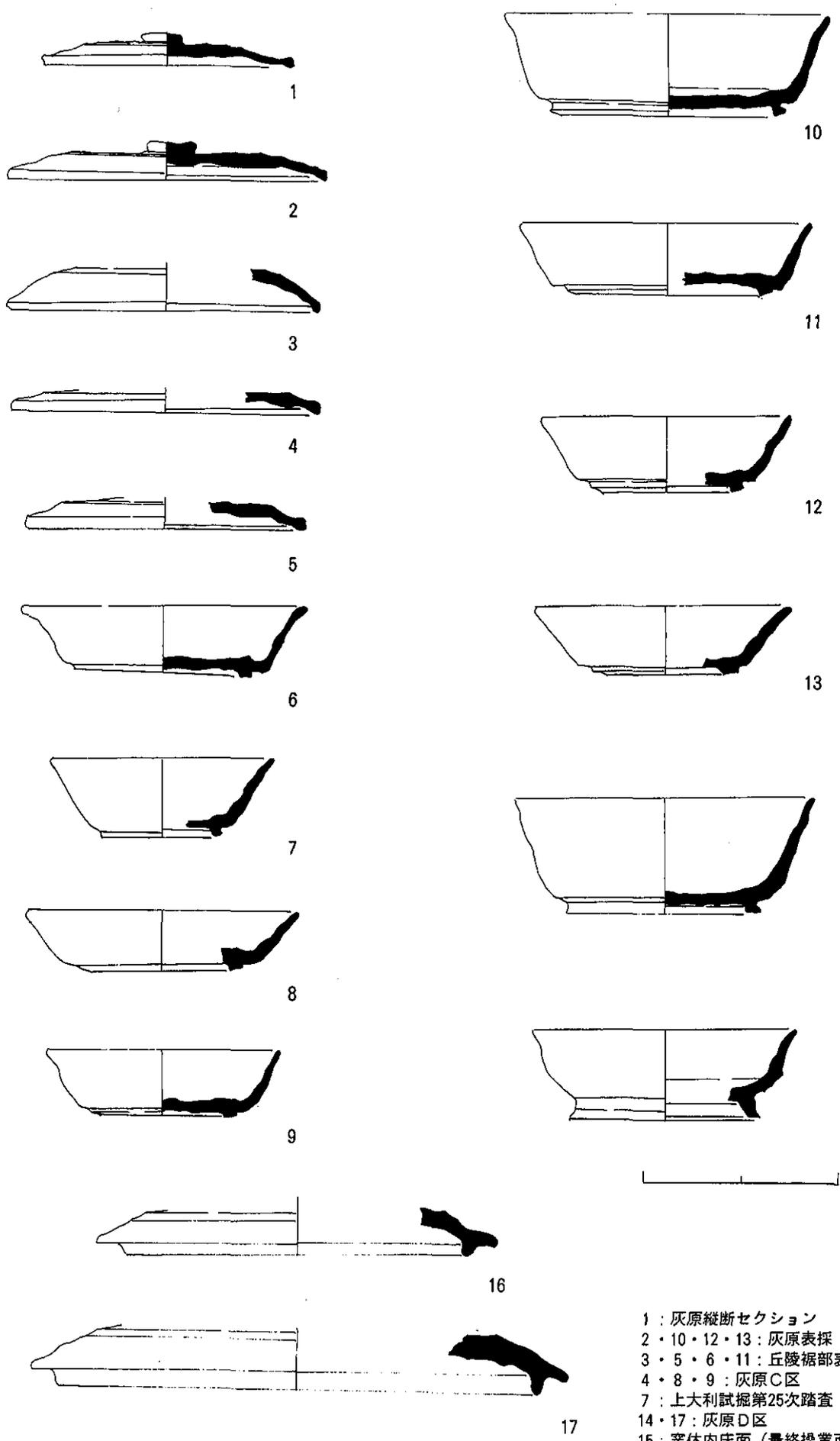
1・10・15：窯体内下層D区右  
 2・17：前庭部縦断セクション  
 3：窯体内下層D区床面  
 4・5：窯体内D区横断たちわり  
 6・7・11・21：窯体内D区左下層床  
 8・12・16：灰原D区  
 9・20：灰原表探  
 13：灰原B 1  
 14：灰原A 2  
 18：灰原C区  
 19：上大利第25地点試掘  
 22：灰原A 1区



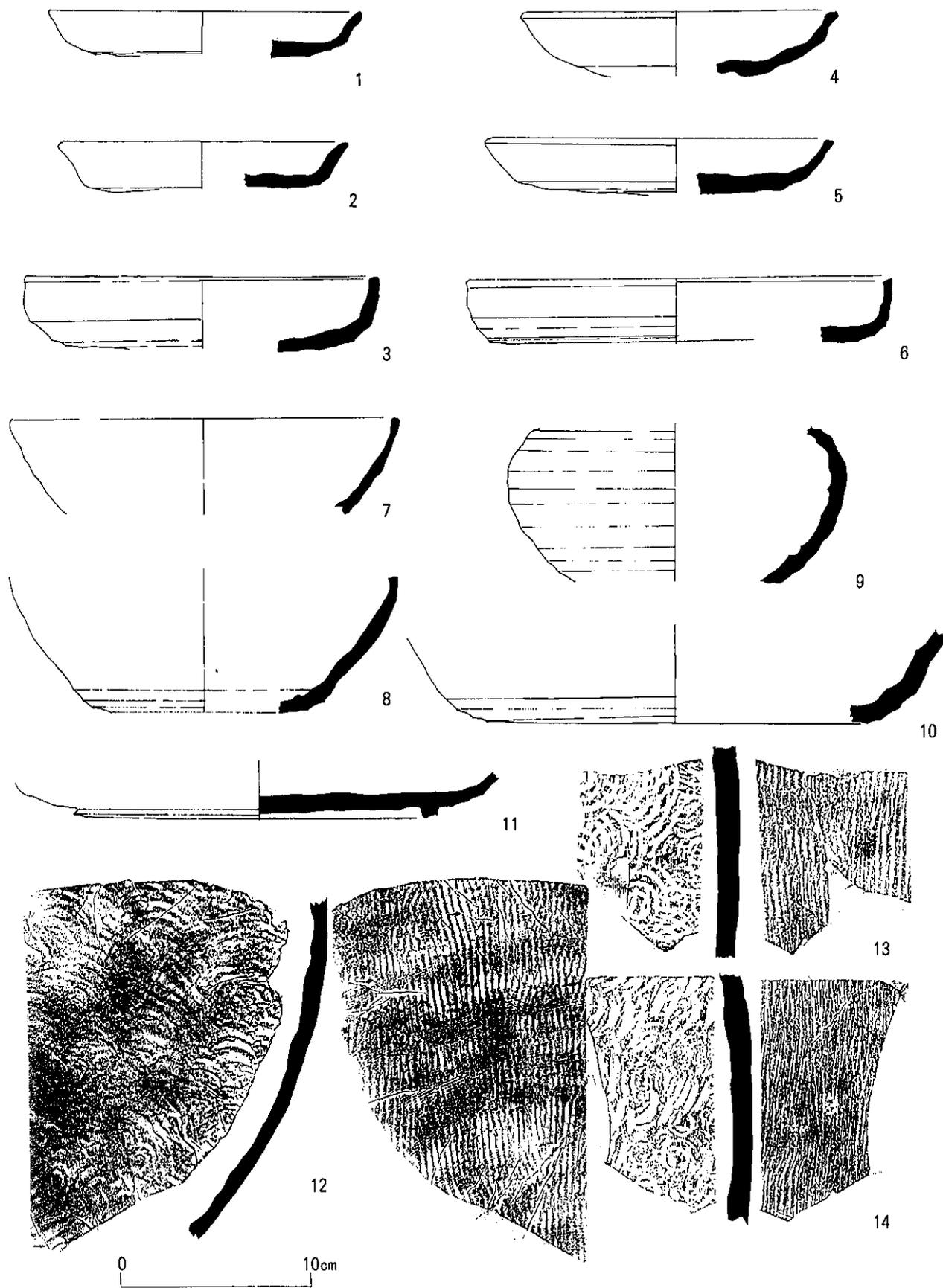
1・3・4：窯体内D区下層床  
 2・13：窯体内D区たちわり下層  
 5・14：灰原C区  
 6：灰原B2区  
 7～12・16・17：窯体内D区下層右床  
 15：灰原B1区  
 18：前庭部縦断セクション



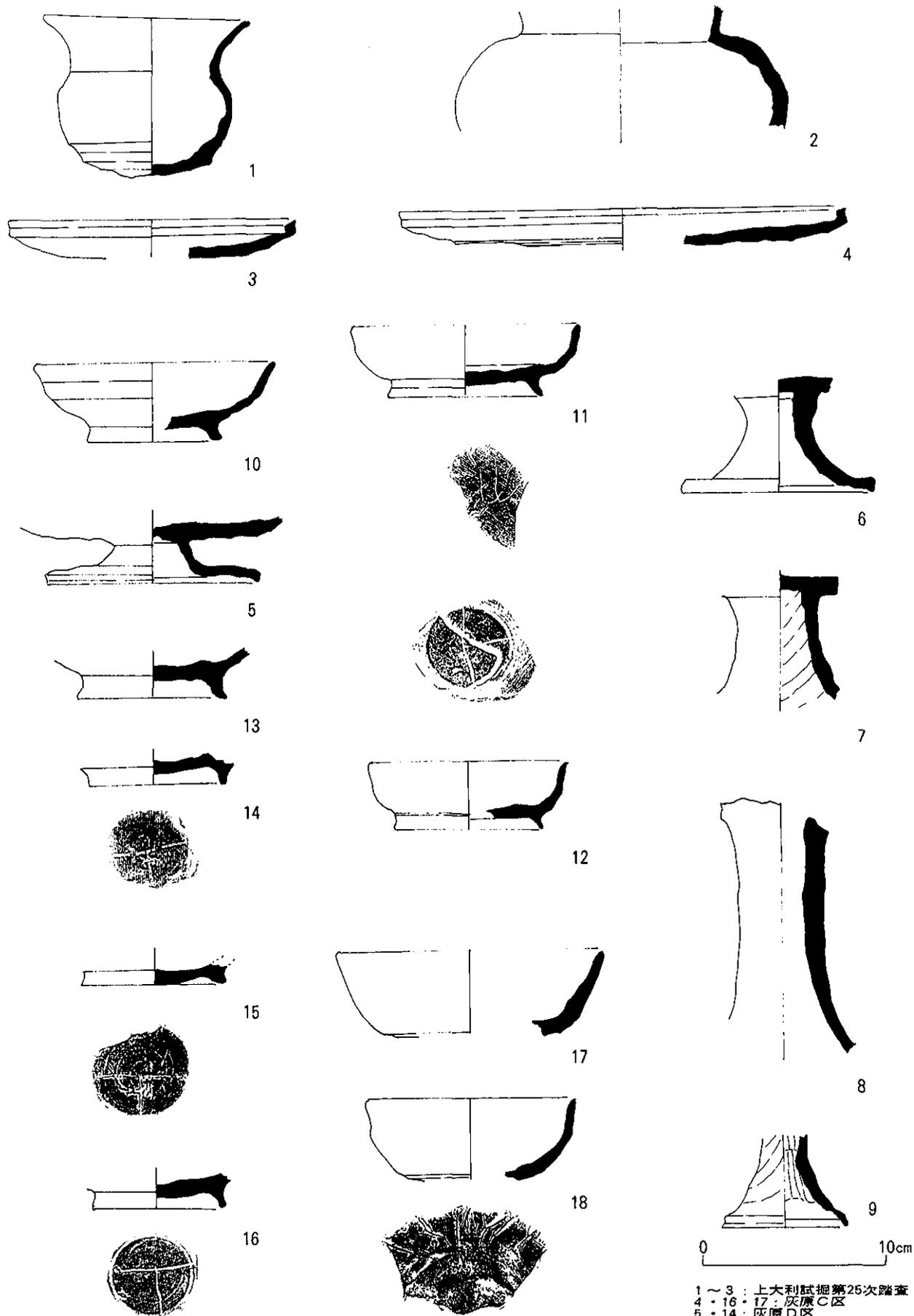
1・4・9・12・14：灰原D区  
 2：窯体内床面（最終操業面）  
 3：灰原表探  
 5・6：焚口左灰層  
 7・8・16：窯体内下層D区  
 10：灰原A2区  
 11：窯体内  
 13：窯体内D区縦断セクション  
 15：灰原A1区  
 17：前庭部縦断セクション



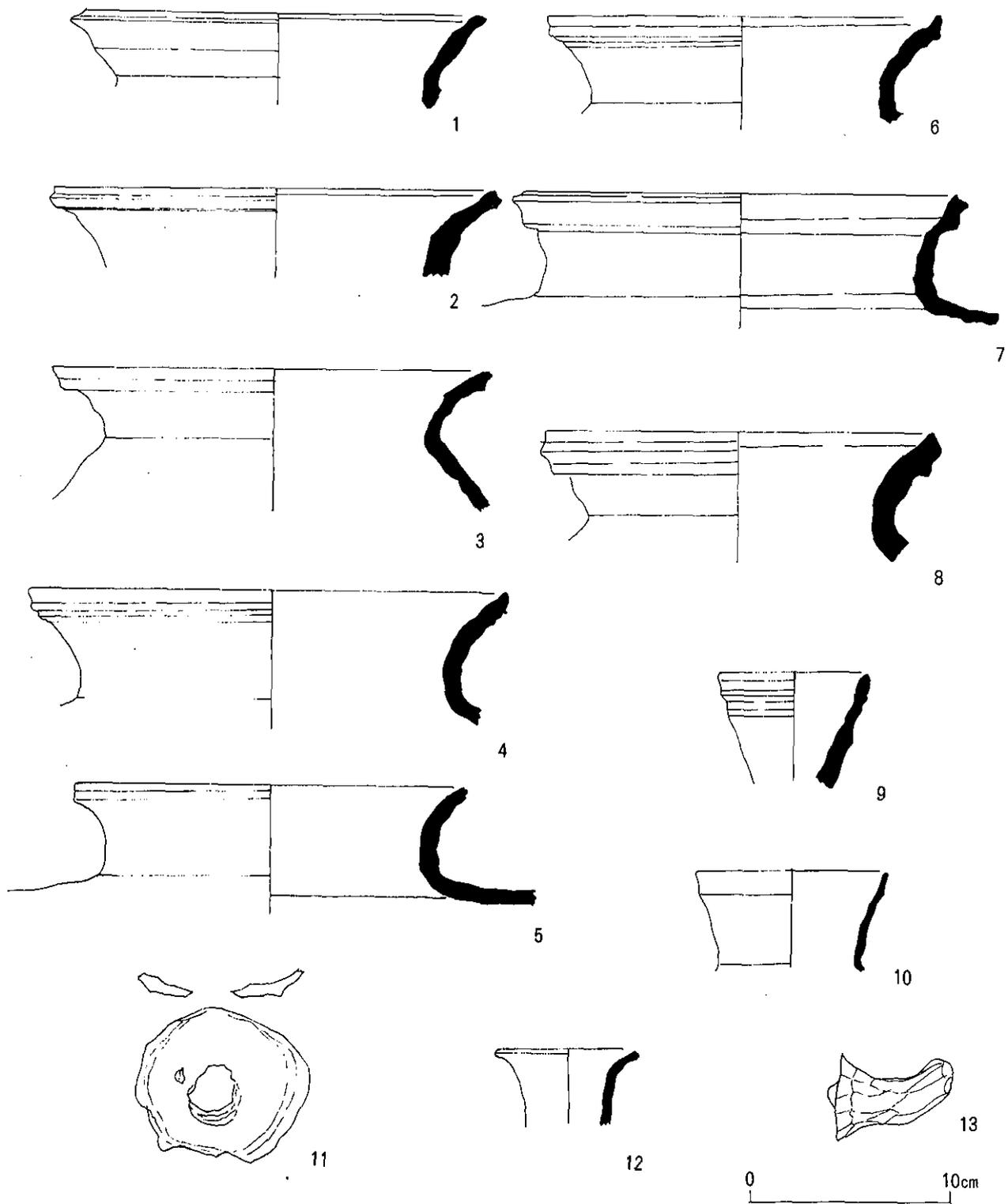
1 : 灰原縦断セクション  
 2・10・12・13 : 灰原表探  
 3・5・6・11 : 丘陵裾部表探  
 4・8・9 : 灰原C区  
 7 : 上大利試掘第25次踏査  
 14・17 : 灰原D区  
 15 : 窯体内床面 (最終操業面)



1～3, 6・7・12: 灰原D区  
 4・5・10: 灰原C区  
 8: 丘陵裾部表採  
 9: 前庭部縦断セクション  
 11・14: 灰原表採  
 13: 窯体内D区左下層



1～3 : 上大利試掘第25次踏査  
 4・16・17 : 灰原C区  
 5・14 : 灰原D区  
 6・8 : 灰原表探  
 7 : 丘陵裾部表探  
 9 : 灰原縦断セクション  
 10 : 灰原下層  
 11・12・15 : 窯体内D区右下層  
 13 : 焚口上層灰原  
 18 : 窯体内D区



11→PL20  
 1・2・4・6・8・10・12：灰原表探  
 3：灰原B2  
 4・7・11：丘陵裾部表探  
 13・14：灰原C区



窯跡全景



同上



窯体内上半の凹地（置台痕）



前庭部灰層セクション



左側壁の状況



窯体近影



窯体たちわり跡（上層面と下層面）



同上 細部



窯体内たちわりの状況C、D区



窯体内下層D区左右の状況



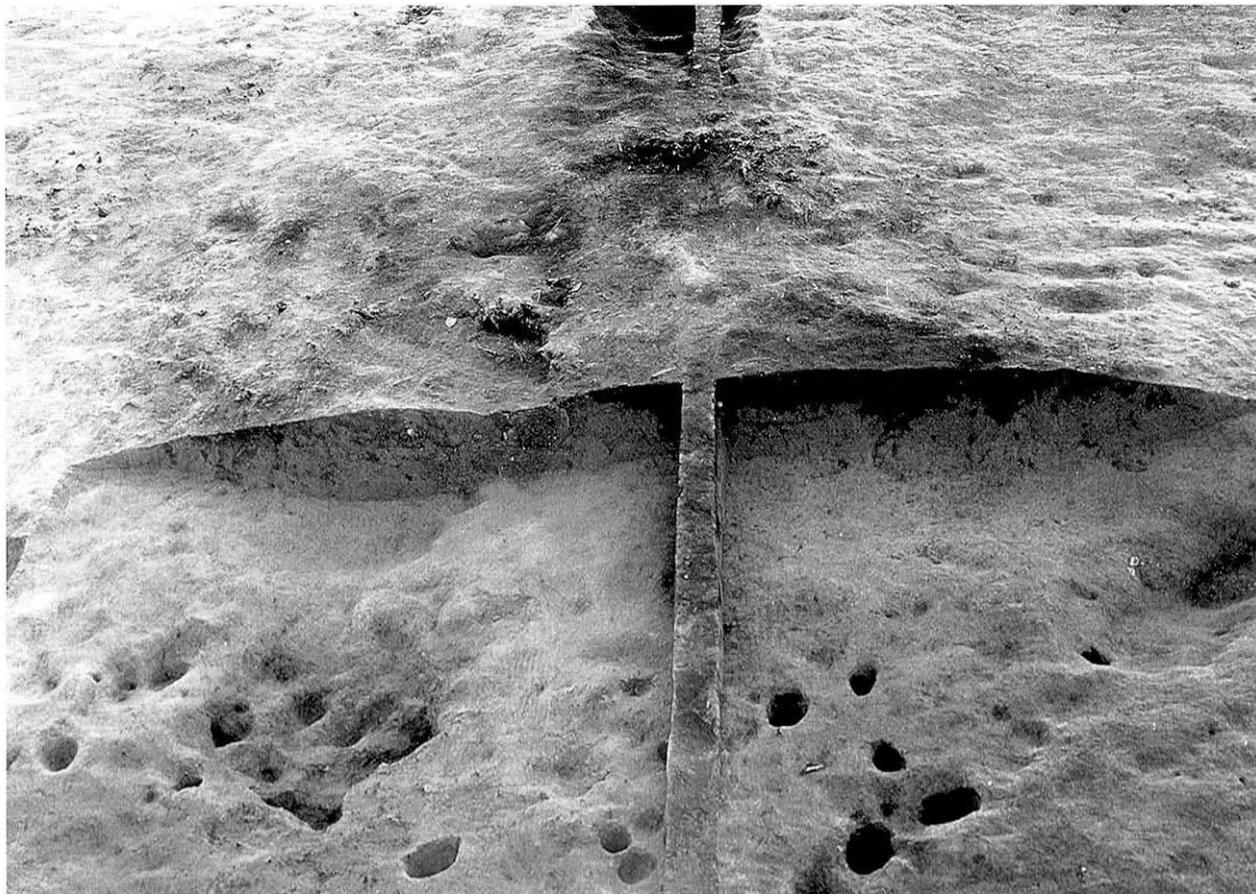
窯体内A区の状況



窯体内B区の状況



窯体内C区の状況



前庭部の状況



灰原縦断セクション



焚口、前庭部の状況



前庭部灰層除去後



6-4



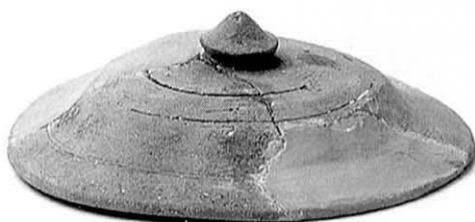
6-6



6-7



6-8



7-1



7-3



7-2



7-9



8-4



8-10

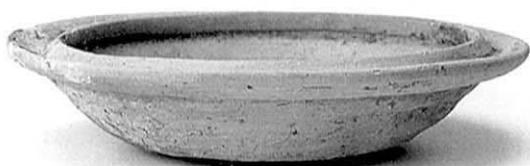
(表示番号は図版番号に対応する)



8-14



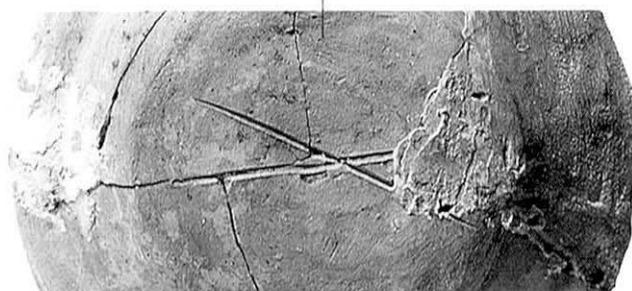
8-19



9-2



9-2



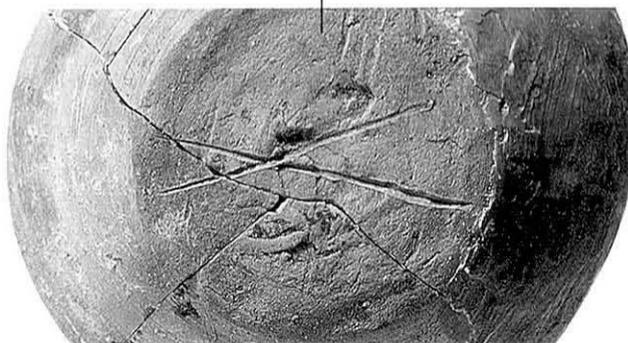
9-5



9-8



9-9



(表示番号は図版番号に対応する)



9-10



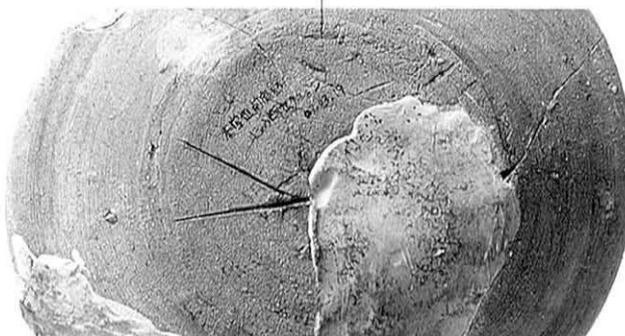
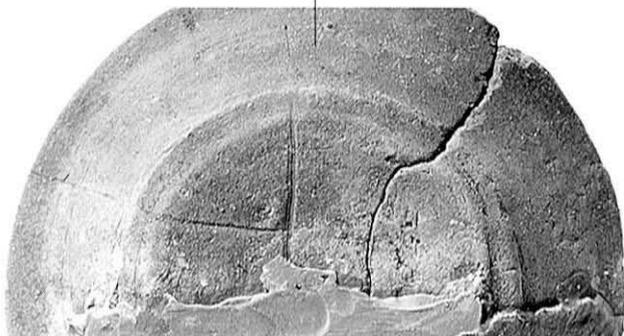
9-12



9-13



9-14



10-1



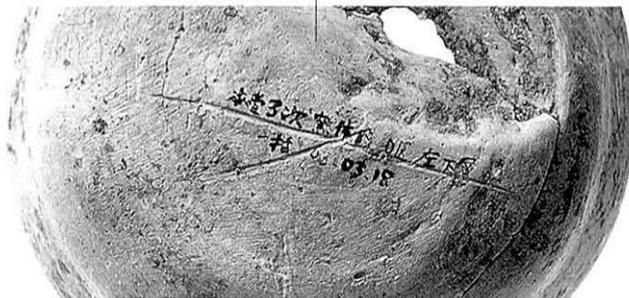
10-4



11-1



11-2



(表示番号は図版番号に対応する)



11-3



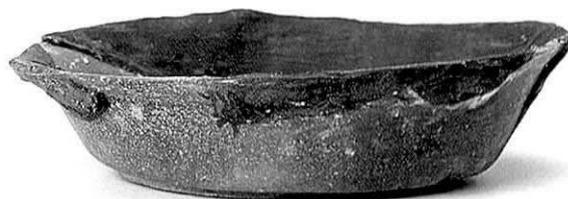
11-7



12-1



12-6



13-6



15-1



15-6

(表示番号は図版番号に対応する)



15-13



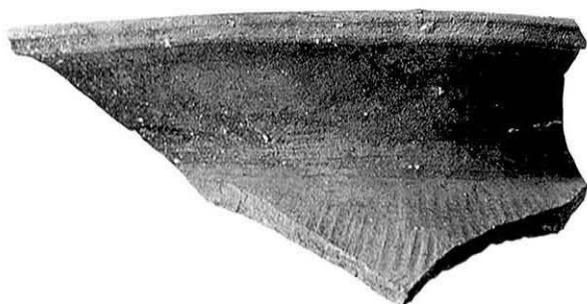
15-16



15-15



15-14



16-3



16-4

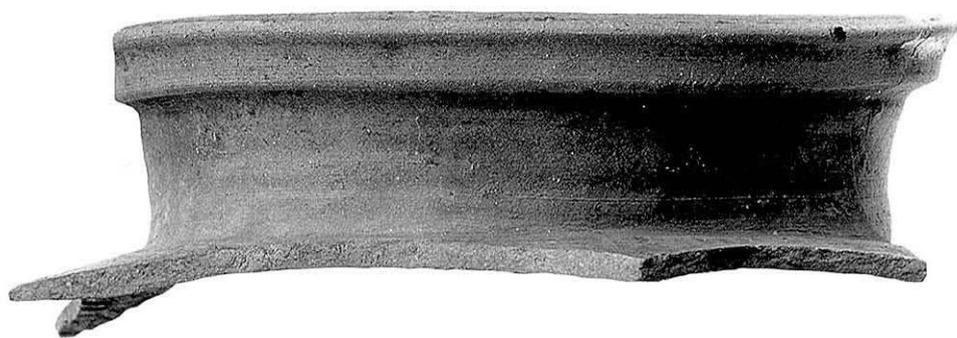


16-5



16-6

(表示番号は図版番号に対応する)



16-7

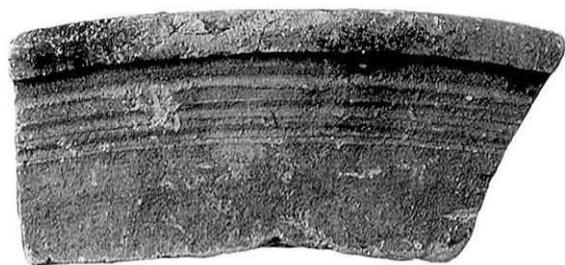


図-14-11



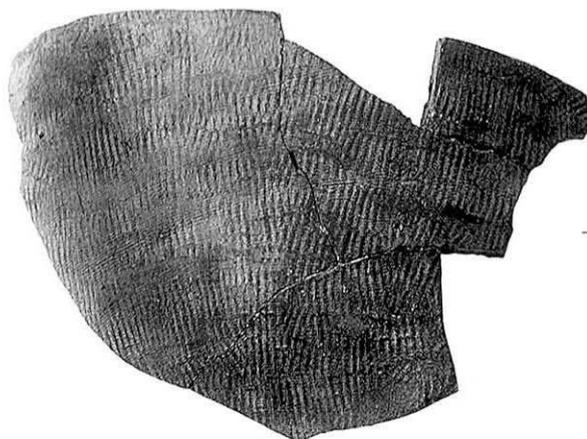
16-8



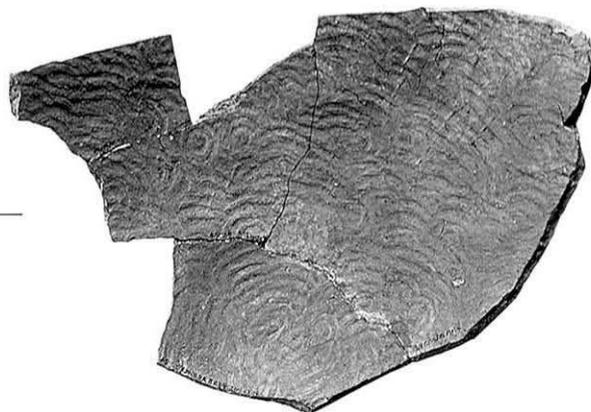
16-11



16-14



14-12



(表示番号は図版番号に対応する)

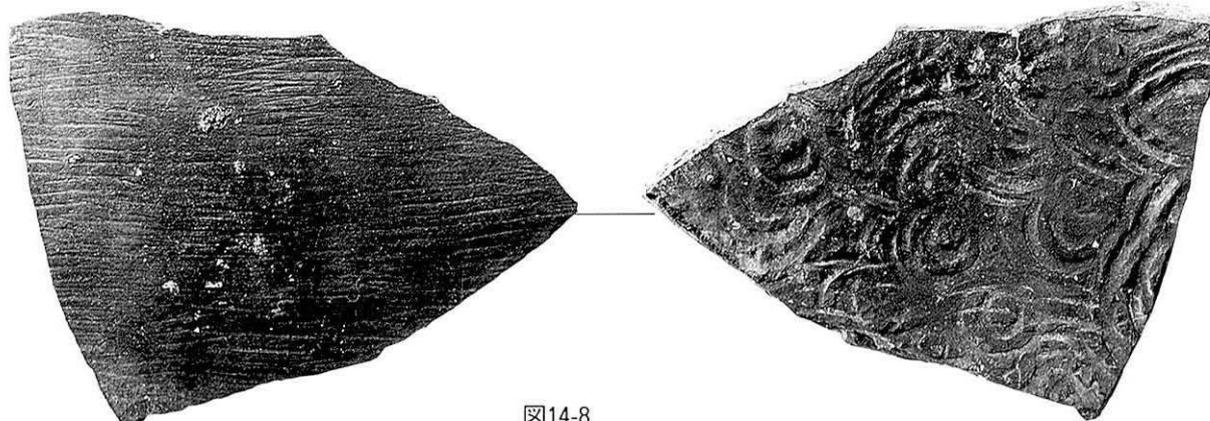
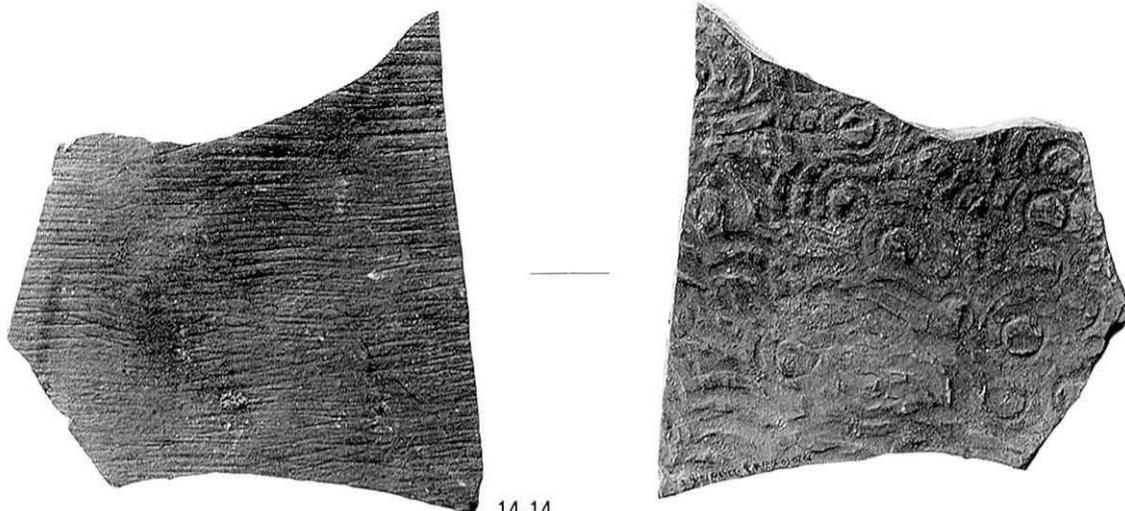


図14-8



14-14

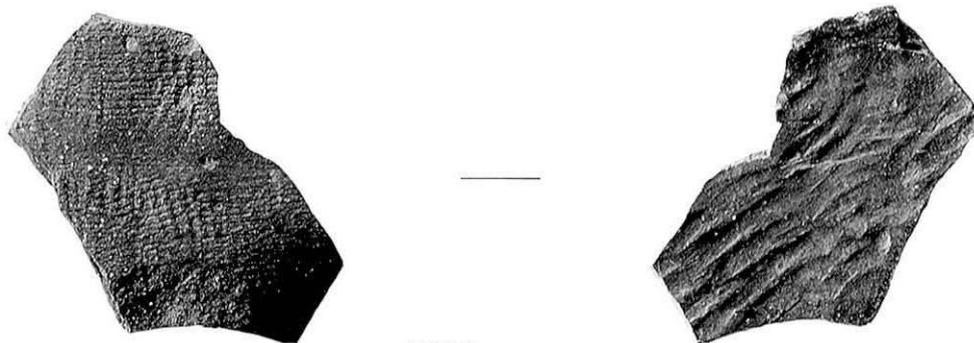


図14-3

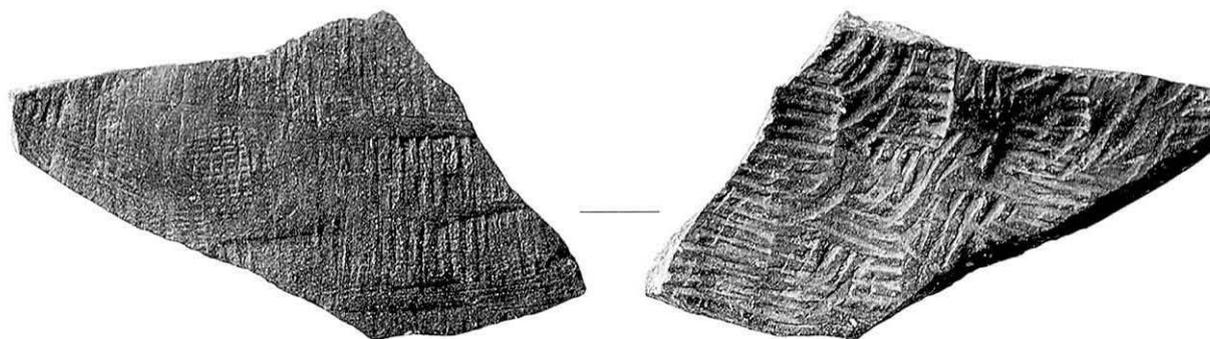


図15-5

(表示番号は図版及び図番号に対応する)

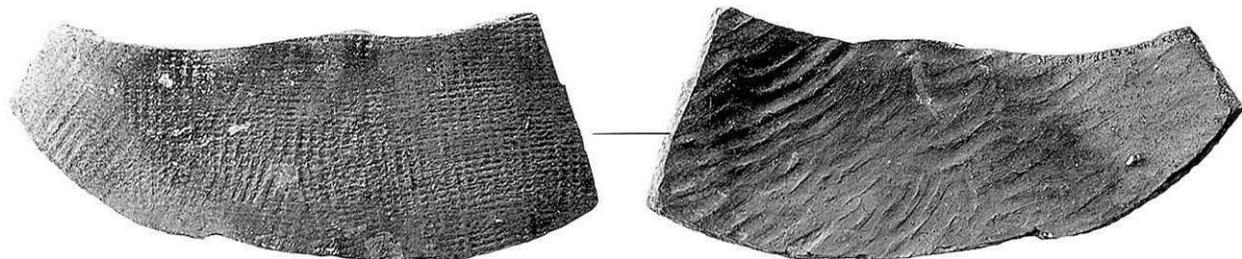


図14-8

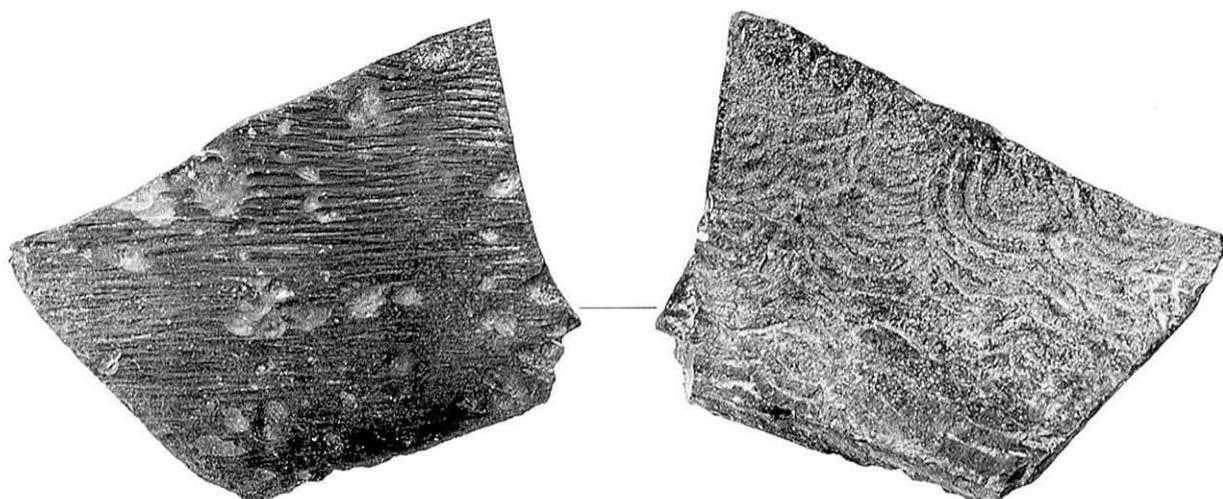


図14-6

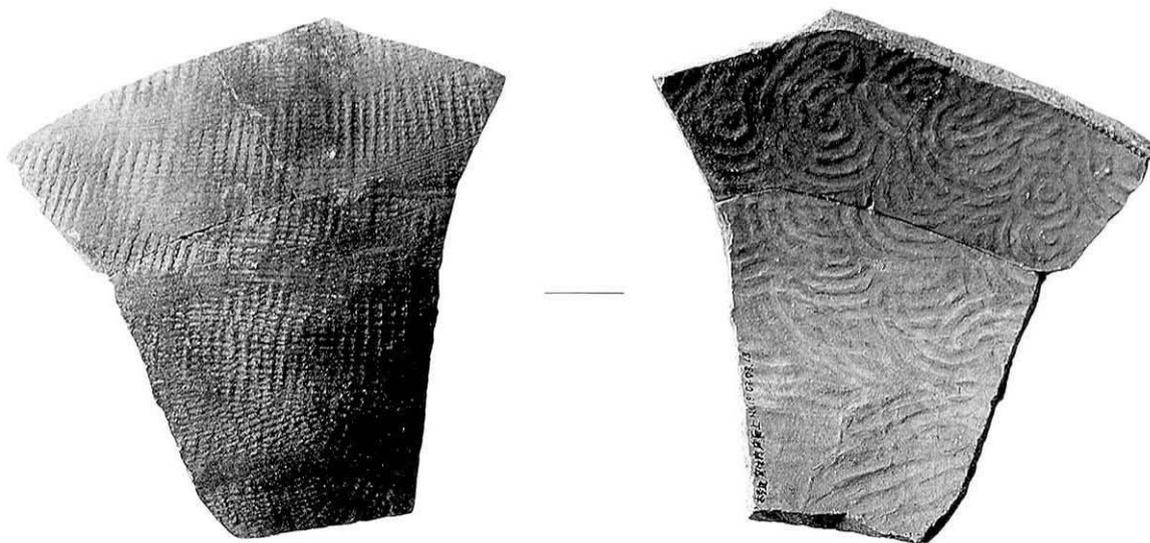


図14-7

(表示番号は図版及び図番号に対応する)

大野城市文化財調査報告書

第61集

平成15年10月

発行 大野城市教育委員会  
福岡県大野城市曙町2丁目2番1号

---

印刷 サンキ印刷株式会社